

Title	18世紀思想史のなかのエドモンド・バーク：ポーコック以後のバーク研究をめぐって
Sub Title	Edmund Burke in the intellectual history of 18th century : on Burke studies after Pocock
Author	塩沢, 晃平(Shiozawa, Kohei)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2025
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.117, No.3 (2025. 2) ,p.481 (215)- 518 (252)
JaLC DOI	10.14991/001.20250201-0215
Abstract	18世紀英国の政治家エドモンド・バークは、「保守主義の父」として知られてきたが、近年の研究は従来のバーク像に見直しを迫っている。本論では、そうした研究動向をもたらしたポーコックのバーク論が研究史上に占める位置を確認したうえで、主として2000年代以降のバーク研究の成果を、道徳哲学・歴史叙述・経済思想の三領域について検討する。それにより、バーク思想を啓蒙思想の一類型ととらえる視座の意義と課題を展望する。 Edmund Burke, a politician in 18th-century Britain, is known as the “father of conservatism.” However, recent scholarship on Burke has attempted to make revisions to the shared image of Burke and situate him in the context of enlightenment thought. This insight was first brought by John Pocock, the impact of whose study on Burke is discussed in the first half of this review essay. In the latter half, the chief themes for Burke’s thought as a variant of enlightenment thought are overviewed: moral philosophy, history, and political economy.
Notes	展望論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20250201-0215

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

18 世紀思想史のなかのエドマンド・バーク ——ポーコック以後のバーク研究をめぐって——

塩沢晃平^{*}

Edmund Burke in the Intellectual History of 18th Century: On Burke Studies after Pocock

Kohei Shiozawa^{*}

Abstract: Edmund Burke, a politician in 18th-century Britain, is known as the “father of conservatism.” However, recent scholarship on Burke has attempted to make revisions to the shared image of Burke and situate him in the context of enlightenment thought. This insight was first brought by John Pocock, the impact of whose study on Burke is discussed in the first half of this review essay. In the latter half, the chief themes for Burke’s thought as a variant of enlightenment thought are overviewed: moral philosophy, history, and political economy.

Key words: Edmund Burke, father of conservatism, enlightenment, manners, constitution

JEL Classifications: B12, B31

本論の執筆にあたり、壽里竜、佐藤空の両先生（慶應義塾大学）から貴重なご助言をいただいた。また、慶應義塾大学大学院経済学研究科にて牧野邦昭先生ご担当の演習出席者諸氏、藤原いお氏（京都大学）、本誌匿名チェッカーの各氏から有益なご指摘をいただいた。以上の方々に感謝申し上げます。残る過誤は、筆者の責任に帰すべきものである。なお、本論は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2123、ならびに 2024 年度の慶應義塾経済学会による博士論文作成のための研究助成制度の支援を受けたものである。

* 慶應義塾大学大学院経済学研究科

Graduate School of Economics, Keio University

k.shiozawa@keio.jp

1. はじめに

エドマンド・バーク (Edmund Burke, 1729/30–1797) は、18 世紀英国で活躍したアイルランド生まれの政治家・著述家である。彼の名は、『フランス革命の省察』(1790, 以下『省察』と略す)の著者として知られている。『省察』は、前年に勃発したフランス革命をうけて、英国でも急進的改革を求める主張が高まることに危機感を覚えたバークが著した革命批判の書であり、しばしば「反革命のマニフェスト」とも形容される (Cobban 1929, 129)。それゆえに、バークは「保守主義の父」とであると理解されてきた。しかし、近年のバーク研究は、そうした従来のバーク像に大幅な見直しを迫っている。本論では、それらの成果を研究史のなかに位置づけ、その意義と残る課題を検討したい。

その前提として、まずは従来のバーク像を確認しておこう。『省察』におけるバークの批判の焦点は、革命フランスが、自然権や国民主権といった抽象的理念を、そのまま実現しようとしたことにある。というのも、バークの考えるところでは、現実社会は複雑であり、理性による推論を直接に適用することはできないからである。

これらの形而上学的権利が人々の共同生活のなかに入ろうとすると、まるで濃密な媒質に差し込んだ光線のように、自然の法則によって直線から屈折させられます。実際、巨大で複雑な人間の情念や利害の塊のなかでは、人間の原始的な権利はあまりにも多くの屈折や反射を受けるため、その元来の方向性をもつ単純さを保ち続けているかの如くに語るのは不条理になります。
(Burke [1790] 1989, 112 / 訳 79)⁽¹⁾

したがってバークは、「私は、この啓蒙された時代のなかで、次のように告白するほどに途方もない人間です」と断って、抽象的原理ではなく、それぞれの社会のなかで歴史的に蓄積されてきた実践知である「偏見 (prejudice)」にたいする信頼を表明する (Burke [1790] 1989, 138 / 訳 110)。こうして、社会を原理的に作りかえる急進的革命は否定され、むしろ、過去から継承されてきた英国の国制 (constitution) を維持しつつ漸進的に改良すること、すなわち「保存しながら同時に改革すること (at once to preserve and to reform)」をめざすべきだと、バークは読者に訴えかける (Burke [1790] 1989, 216 / 訳 213)。

このような主張から「保守主義の父」というバーク像が導かれるが、事態はそう単純ではない。まず、「保守主義 (conservatism)」という語が生まれたのは 19 世紀初頭であり、バークが自らの立場を「保守主義」と規定することはなかった。近年の受容史研究の成果によれば、「保守主義の父」

(1) 以下、引用に際して、訳書がある場合は頁数を併記したが、訳文は適宜変更している。

というパーク像が普及したのは 19 世紀から 20 世紀への世紀転換期であり、それは体系的な理念の構築をめざした英国の保守党によって推進されていた。冷戦期には、共産主義に対抗する言説資源をもとめた北米の新保守主義者によって、「保守主義の父」たるパークの議論が喧伝された。⁽²⁾したがって、「パークは保守主義者であった」とか、「パークは『省察』によって保守主義を定式化した」といった言明は、一定の政治的状況下に形成された言説であり、歴史的には不正確である。

さらに、パークの残した知的足跡は、フランス革命論に限られない。『省察』以前のパークは、国王ジョージ三世による親政の試みに反対し、アメリカ独立を擁護し、インドにおける英国の苛烈な植民地支配を批判する「リベラル」なウィッグ党の政治家として知られていた。この時期のパークが表明した、私的利益を追求する「党派 (faction)」とは区別された「政党 (party)」の積極的な擁護や、議員は選挙民の意向に拘束されるのではなく、信託にもとづく国民全体の利益のために行動すべきだという「国民代表」の理念は、近代の議会政治をめぐる理論的展開をもたらすものと評価されている。⁽³⁾また、1765 年に下院議員として政界に進出する以前のパークは著述家として活動しており、代表作『崇高と美の概念の起原の探究』(1757)は、I・カントの崇高論や G・E・レッシングの詩画比較論に先駆けた古典としての地位を美学史上に約束されている。⁽⁴⁾

こうしたパークの政治家・著述家としての多年にわたる活動は、時々の経済問題への言及を多分に含んでおり、後年の経済学者からも一定の注目を浴びてきた。若き J・M・ケインズが「エドモンド・パークの政治学説」(1904)と題された論文を執筆して、パークの経済論を詳細に検討した一方で、対する F・ハイエクもまた自身の評価する「真の個人主義」の系譜にパークを取り入れ、著作で繰り返し引用している。⁽⁵⁾これら相反する立場にある論者が、それぞれの視点からパークを高く評価したという事実は、あるべき経済政策をめぐる 20 世紀の社会哲学の展開過程におけるパークの反響を示すと同時に、パーク思想の多面性を物語っている。

(2) 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて「保守主義の父」というパーク像が形成された過程については、Jones (2015); 犬塚(2017a); 犬塚(2017b)が詳しい。また、英国と欧米におけるパークの受容史研究としては、Jones (2017); Fitzpatrick and Jones eds. (2017); Maciag (2013); Deane (2012)などがある。Bourke (2018)は、これらの受容史研究の成果をふまえて、20 世紀における保守主義の類型を検討して、パークを起点とする保守主義という連続的な伝統は存在しないことを確認している。日本のパーク受容については、柳(2014)のほか、中野(2002, 117-204)を参照。

(3) 代表制についての古典的研究として Pitkin (1969)を、代議政治における理論家兼実践家としての側面にパークの最大の貢献をもとめる研究として Connif (1994)を参照。Craig (2012)と岸本・松園(1999)はパークの政党論・代表論の全体像を、古賀編(2013)所収の諸論文は簡便な概念史を提供している。

(4) 美学史上のパークの位置について、邦語の文献では、以下のものを参照。桑島(2017a)は、18 世紀の古典主義パラダイムのなかに『崇高と美』の視覚中心主義的態度を位置づけたうえで、そのパラダイムから離脱する触覚中心主義的視点の存在を指摘し、反古典主義＝ロマン主義への移行を見出している。また、崇高概念の系譜におけるパークの位置については星野(2017, 第 5 章)が、パークの趣味論については小田部(2024, 第 2 章)がある。

以上のように、バークの知的活動は多方面にわたり、「保守主義の父」というバーク像は、その一側面を切り出したものにすぎない。それゆえ、「今日の真剣な歴史家であれば、バークは近代保守主義の父であったという決まり文句を繰り返すことはないだろう」(Bromwich 2014, 19)。この D・ブロムウィッチの言葉に象徴されるように、現代のバーク研究は、とりわけ同時代の歴史的文脈に目を配ることによって、従来のバーク像を相対化する傾向にある。

次節では、このような近年の研究動向に多大な影響を与えた J・G・A・ポーコックのバーク論を中心に、研究史を回顧する。それにより、バーク思想を「反動」ではなく、むしろ同時代の啓蒙思想の一類型としてとらえる視点が普及した次第が理解されるだろう。そのうえで、バーク研究上の多岐にわたる論点、多数にのぼる文献を網羅することは困難ゆえ、第3節以降では、筆者の関心にしたがって主題を限定する。具体的には、道徳哲学・歴史叙述・経済思想の三領域について、主として2000年代以降の研究が取り組んでいる課題をそれぞれ検討する。それにより、ポーコックがもたらした、18世紀の啓蒙思想の一類型としてのバーク思想という観点が、その後の研究に提起した課題の行方を展望したい。

2. リヴァイヴァルからリヴィジヨニズムへ

「保守主義の父」というバーク像の更新を試みるリヴィジヨニズム的研究の活況は、J・G・A・ポーコックが1960年と1982年に発表した二つの論文に負うところが大きい。とはいえ、ポーコックのバーク論は、いみじくも R・バークが指摘するように、「決定的というよりも問題提起的 (more suggestive than conclusive)」である (Bourke 2007, 403-404)。本節では、ポーコックのバーク論の要点と、それが20世紀後半に興隆したバーク研究のなかで占める位置を概観することで、それがいかなる意味で問題提起的であったのか確認しよう。

ポーコックの画期性は、まずもって、『省察』における有名な一節の新たな読み方を提示したことにある。1960年初出の論文「バークと古来の国制」でポーコックは、前節で見たような『省察』の主張を取り上げ、それを「伝統主義 (traditionalism)」と呼ぶ (Pocock 1971, chap. 6)。すなわち、合理的推論よりも実践をつうじて蓄積された知恵を尊重し、そうした試行錯誤の結果として形成された現存の諸制度を擁護する『省察』の議論は、「保守主義の歴史にかんする百冊もの教科書に見出すことができる」 (Pocock 1971, 202)。こうした「教科書的なバーク (elementary Burke)」の主張に、従来とは異なる理解を与えることがポーコックの企図である (Pocock 1971, 203)。

『省察』をめぐる解釈上の論点は、大きく二つに整理することができ、ポーコックの議論もそれら

(5) ケインズのバーク論については中澤 (2018) と間宮 (2014) を、ハイエクとバークの関係については Collins (2022) と中澤 (2015b) を参照。E・ジョーンズは、ケインズのバーク論を「バークの経済思想について英国で書かれた最も体系的な (だが未公開の) 分析かもしれない」と評している (Jones 2021, 21)。

の論点に（独特な仕方）で応答するものといえる。第一に、『省察』はバークの「一貫性」問題を惹起する。『省察』の出版は、同時代人たちにはバークの「変節」と受け止められ、アメリカ独立を擁護したバークと、フランス革命を批判したバークとのあいだの矛盾が問われた。このことは、バークには体系的な思想は存在しないのではないかとというさらなる疑問も生む⁽⁶⁾。第二の論点は、仮に『省察』が体系的思想の表明であるならば、同時代の啓蒙思想との距離を、どのように理解するかという問題である。バーク自身が、「私は、この啓蒙された時代のなかで、次のように告白するほどに途方もない人間です」とレトリカルに述べていたように、「裸の理性」を信用するフランス啓蒙への批判は、「反動」的であるように見える。

この第二の論点について、バークを「政治的合理主義 (political rationalism)」にたいする「反動」とみなす解釈を乗り越えることを、ポーコックは1960年の論文で試みる。具体的には、普遍的理念を信奉する啓蒙主義を克服して人間的生の個別性を重視する歴史主義が花開く前段階にバークを位置づけたF・マイネッケの『歴史主義の成立』(1936)が批判的に言及されている(Pocock 1971, 203-204)。類似の解釈は、一貫して反合理主義に彩られているバーク思想の独創性を「複雑な機構と歴史的連続性をもつ生きた有機体として国家をとらえる見方」にもとめるL・スティーンにも見られるし、I・バーリンは、こうしたバークの議論を後のロマン主義と同じ「反啓蒙 (Counter-Enlightenment)」の系譜に数えている(Stephen 1876, II, 225, 230, 248-249 / 訳下 101, 107, 125; Berlin [1979] 2013, 11, 17-18 / 訳 23, 32-34)⁽⁷⁾。

このような解釈にたいしてポーコックは、『省察』における「伝統主義」は「反動」ではなく、それ自体が長い伝統をもつコモン・ロー思想の「古来の国制」論に由来する思考様式であると主張する。ただし、記憶を超えるほど太古から連続する慣習法に国制を基礎づけるコモン・ロー学者とは異なり、バークは、モンテスキューやスコットランド啓蒙に似た語彙を使用し、法の歴史的変動を「国民の習俗、宗教、商業」などの法とは独立した要素によって説明する視点も有していた(Pocock 1971, 222-225)。それゆえ、ポーコックは、次のように結論する。

重要なのは、以上の分析があまりにも多くのことを主張しているとみなされるべきではないということである。それは、バーク思想の一側面——伝統的諸制度のもつ卓越した知恵という彼の学説——に限定されており、それだけを孤立的に扱っている。彼の社会・政治哲学には、伝統主義のほかにも多くのものがあり、その全部または一部を、彼がコモン・ローの伝統に属していることによって説明できると示唆しているわけではない。彼の思想におけるそれらの意味と

(6) この点をめぐる研究動向については、Lock (1985, 88-99); 中澤(2009, 77-83); 高橋(2024, 142-144)を参照。O'Neil (2016, 5-10)の議論は、バーク思想の一貫性を問う妥当性を方法論の次元で吟味しており有益である。

(7) ロマン主義の先駆というバーク理解の概略と問題点については、Bourke (2012b)を参照。

位置を理解するためには、おそらく、自然法、ヒュームの哲学、モンテスキューの社会学、ロマン的感性 (romantic sensibility) の興隆を引き合いに出すべきだろうし、もしも彼の思想の諸側面のいずれか一つを他の側面とともに、哲学的な体系に還元したいのであれば、さらに複雑な操作が必要なのは明らかである。現実についてのバークの統一的な視角が——もし彼がそれをもっていたとして——コモン・ローから引き出されていたと示唆しているわけではない。むしろ、ある孤立した要素とみなされた場合の、バークの伝統主義を説明するためには、彼が同時代人との会話でもちいる政治言語の一部として一般に使用されていたところの、コモン・ローに由来する (と彼が認識していた) 特定の諸概念を、彼が継続的に使用し、深い理解を発展させていたと想定する以上の必要はない、ということが示唆されている。(Pocock 1971, 231-232)

長さをいわず引用したのは、この一節に、ポーコックのバーク解釈の特徴がよくあらわれているからである。その一つは、「言語」の歴史というポーコックの方法論的な独自性である。この点が、バーク思想を「反動」とみなし、ロマン主義や歴史主義の先駆とみなす解釈にたいするポーコックの批判を生んでいる。すなわち、ポーコックによれば、そうした解釈は、ある思想家の議論を一貫した哲学的体系に還元し、ある時代を支配する哲学的基礎の根本的变化によって思想史を記述できるという「誤解」にもとづいている (Pocock 1971, 204)。むしろ、その思想家がもちいる「言語」に注目することで、彼の言説の歴史的な説明を得ることができるとポーコックはいう。

こうして、ポーコックは「反動」や「反啓蒙」としてのバーク解釈を退ける。この点で、『省察』をめぐる第二の論点にたいするポーコックの立場は明快である。しかし、バークの「一貫性」をめぐるポーコックの見解は判然としない。ポーコックはバークの「統一的な視角」の存在に懐疑的であり、バークがもちいる複数の「言語」がどのように両立しているのかは曖昧である。

このようなポーコックの解釈の特徴を明確にするために、同時期に展開された二つの研究者集団によるバーク解釈と比較しておこう。まず、英国の歴史学界では、戦間期から 1950 年代ごろまでネーミア学派が支配的な地位を占めていた。L・ネーミアは、1750・60 年代のイギリス下院議員の徹底した実証的調査によって知られる。その結果、ネーミアは、彼らの行動は地縁・血縁などの利害関係にもとづく権力闘争というべきものであり、従来ウィッグ史学が自明視していたような政党や理念は存在しないと主張した。⁽⁸⁾ それゆえ、ネーミア学派は、「ウィッグ政治の提起者でウィッグ史家のよりどころであったエドモンド・バークを、ほとんど個人的なレベルで嫌った」(Langford 2002, 3 / 訳 5)。ネーミアにとってバークは、「現実から目をそむけ、現実を自身の想像による作り話で取り替えが

(8) 実証主義的な手法を実践し、近代的な歴史学の成立に寄与したネーミア学派は、戦間期から 1950 年代ごろまでの英国の歴史学界で絶大な影響力を誇ったが、あらゆる現象を権力政治に還元する歴史観にたいしては、その後さまざまな批判が向けられた。政治史の分野におけるネーミア学派への批判については、青木(1980)の整理が有益である。

ちな哀れな観察者」にすぎず、利己的な政治家の代表的存在であった(Namier 1958, 895)。したがって、すべてを権力闘争に還元するネーミア学派にとって、バークには一貫した思想体系など存在しない⁽⁹⁾。

他方で、北米の政治理論家たちは、バーク思想の基礎にキリスト教的自然法思想の一貫した体系を見出すことで、ネーミア学派による極端に低いバーク評価を覆すことを試みていた。その先鞭をつけたのは、R・ホフマンや R・カークらの新保守主義者である。こうしたバーク解釈を展開するにあたり、L・シュトラウスが『自然権と歴史』(1953)で提示した図式が利用された。すなわち、シュトラウスによれば、自然法に優位をおく古典的自然法思想から、自然権に優位をおく近代的自然法思想へと転換するなかで、バークは(ルソーとともに)前近代への回帰を「土壇場になって」試みた(Strauss 1953, 294 / 訳 378)。シュトラウスの図式に沿って、トマス・アクィナスに代表されるような古典的自然法思想の原理をバークに見出すことで、P・スタンリスや F・キャナヴァンは、「保守主義の父」としてのバークの復権を試みる「バーク・リヴァイヴァル」を推進した(Stanlis [1958] 1986; Canavan 1960)⁽¹⁰⁾。この動きを代表するスタンリスは、「あらゆる重要な政治問題」において、「バークは常に自然法に訴えた。さらに、自然法によって、バークは常に本質的に同じことを意味した」と主張して、バーク思想に高度な一貫性を見出している(Stanlis [1958] 1986, 83)。

これらの対極的なバーク解釈に比して、ポーコックは独自の位置に立つ。すなわち、「言語」が歴史においてもつ意義を強調するポーコックは、言説や原理に一切の重要性を認めないネーミア学派から距離をとる(Pocock 1985, 33-34 / 訳 60)。また、上述のように、ある思想家を特定の哲学的立場に還元することにポーコックは懐疑的であり、スタンリスらのバーク解釈にたいしても冷淡である(Pocock 1987, xlvii-xlviii)。このように、ポーコックの 1960 年の論文は「言語」という方法をバーク解釈に導入することで、「反動」という理解も、ネーミア的な低評価も覆すことができた⁽¹¹⁾。

しかし、バーク思想の体系性を前提にしないポーコックの解釈は、その点でネーミア学派に近いともいうことができ、バーク思想の全体像は未だ判然としない。その後の英国の歴史学者たちは、この点をめぐって議論を展開させている。たとえば、Lucas (1968)はバークの「時効」概念に注目し、それは自然法の伝統にも、コモン・ローの伝統にも見出せない独創的なものであることを指摘して、スタンリスの自然法解釈とポーコックのコモン・ロー解釈の双方を批判している⁽¹²⁾。政治史の文脈においては、O'Gorman (1973)がバーク思想の体系性を否定しつつ、彼が属するウィッグの党利の立

(9) ネーミア学派のバーク解釈については、Smyth (2012)のほか、鶴田(1977, 163-176); O'Brien (1992, xli-lix)を参照。

(10) ただし、犬塚元によれば、スタンリスらのシュトラウス理解は浅薄であり、両者は潜在的に緊張関係にある(犬塚 2017a, 31)。シュトラウスにおけるバークについては、Lenzner (1991); Collins (2019); 佐藤一進(2019); 厚見(2019)を、スタンリスの研究については Nelson (2005)を参照。

(11) 末富浩によれば、以上のようなポーコックのバーク解釈は、ポーコック自身の「歴史について語る言説そのものが歴史内在的なものである」という歴史観⁽¹²⁾が投影されたものと理解しうる(末富 2003, 64)。

場から政党を論じていたことを実際の政治的文脈のなかで描き出した⁽¹³⁾。あわせて、この時期の重要な動向として、書簡集・著作集の公刊がはじまり、従来フィッツウィリアム家に所蔵されていたパーク関係文書が、1949年にシェフィールド市立中央図書館で公開されたことをうけ、未公刊草稿の出版がすすんだ⁽¹⁴⁾。これら一連の基礎資料の整備が、戦後のパーク研究を後押ししたといえる。

さらに、20世紀後半の歴史学一般の動向として、一国単位の世界史を中心とした記述が相対化され、経済史・社会史・帝国史などへと視野が拡大した。18世紀英国史も例外ではなく、たとえば、E・P・トンプソンは、18世紀をつうじて頻発した食糧暴動のなかに、市場経済とは異なる「モラル・エコノミー」と呼ばれる民衆規範を見出し、それを破壊した「ポリティカル・エコノミー」の担い手として、アダム・スミスとともにパークを挙げている(Thompson 1991)。また、J・C・D・クラークは、商業活動の勃興による進歩的・動態的な18世紀像を強調する経済史家にたいして、国王、国教会、地主貴族のヘゲモニーが貫徹していたという保守的・静態的な「アンシャン・レジーム」として18世紀英国を描き出し、そうした体制を支持するアングリカン政治神学にパークも依拠していたと主張した(Clark 1985, 247-258)⁽¹⁵⁾。こうして、歴史学の動向をうけながら、政治的観点のみならず、社会・経済的観点からもパークへと光が当てられるようになっていった。

同様の視野の拡大は、北米の政治理論家によるパーク研究にも見出すことができる。1970年代に入ると、スタンリスらの自然法解釈とは異なり、左派的な立場によるパーク解釈が目立ち始める。代表例は、フロイト的精神分析の視角から、公刊された書簡集をふんだんに利用して、パークを、貴族主義的な旧秩序と資本主義的な新秩序とのあいだで引き裂かれた人物として描く Kramnick (1977) である。この見解を、Macpherson (1980) はさらに極端にして、一貫して資本主義的秩序を支持した「ブルジョワ経済学者」としてパークを理解した⁽¹⁶⁾。ここでマクファーソンが依拠していたのが、E・P・トンプソンの階級対立を強調する歴史像であった(Kramnick 1983, 207-208)。こうした動きにたいして、自然法解釈をとる研究者も、パークの経済認識を無視できなくなった。Canavan (1995) は、

(12) 同じく Dreyer (1979, 73-89) は、スタンリスとポーコックの両方を批判して、パークはロック的な伝統に根ざしていたと主張する。

(13) 本書への書評論文として Brewer (1975) を、この時期の研究状況について小松(1983, 425-455)を参照。近年では、Skjónsborg (2021) が、パークはロックンガム派のウィッグ主義に意義を見出し、政党政治の原則を実践していたと主張している(chaps. 10-12)。

(14) T・コーブランドが編者代表を務めた全10巻の書簡集の公刊が1958年から、P・ラングフォードを編者代表とする全9巻の著作集の公刊が1981年からはじまった(前者は1978年に、後者は2015年に完結)。初期パークの草稿類が『エドマンド・パークのノート・ブック』としてH・V・F・サマセットによって出版された(Somerset 1957)。『ノート・ブック』所収の草稿は、パークと「いとこ」ウィリアム・パークの草稿が混在しているが、その執筆者については現在でもサマセットの推定が支持されている。くわえて、Lock (1997); Lock (1999); Lock (2003) によって、計55通の未公刊書簡が出版された。

(15) 18世紀英国の歴史像をめぐる研究動向については坂下(2010)を、トンプソンの提起したモラル・エコノミーをめぐる議論については音無(1998)を参照のこと。

18 世紀英国の農本的性格を強調しつつ、バークは一貫して土地所有権の保障を支持していたと主張し、バークの保守性をあらためて強調している。

このような学界動向のなかで、1982 年に発表されたポーコックの第二のバーク論「バークのフランス革命分析の政治経済学」は、表題の通りバーク経済思想の理解に重要な貢献をなした。そこでは、1960 年の論文で曖昧なままになっていた論点、すなわち国制の連続性を強調する「古来の国制」論の立場と、「習俗、宗教、商業」などによる変動を認めるモンテスキューやスコットランド啓蒙的な見解との整合性が敷衍されている (Pocock 1985, chap. 10 / 訳 10 章)。すなわち、ポーコックによれば、情念を穏和化する作用を商業に見出したスコットランド啓蒙の思想家たちは、習俗 (manners) を洗練させ、熱狂を抑制するという理由で商業社会を擁護していた。これらの「政治経済学 (political economy)」の語彙を利用しつつ、バークは、「商業は習俗に依存するのであってその逆ではない」と因果関係を逆転させることで、近代の商業の基礎にある「紳士の精神と宗教の精神」という習俗を破壊したフランス革命を批判することができた (Pocock 1985, 199 / 訳 380)。そのため、近代社会の基礎にある習俗を維持することが、「古来の国制」の一要素であると考えれば、バークの「政治経済学」の語彙とコモン・ロー思想の発想を矛盾なく理解することができる (Pocock 1985, 210 / 訳 400)。

しかし、「商業は習俗に依存する」というバークの歴史観は、「スコットランドの歴史認識の重要な修正」である以上、スコットランド啓蒙とは逆に、近代の商業社会にたいする「反動」の契機を内包しているのではないかという疑念が残る (Pocock 1985, 210 / 訳 401)。それを解消するためには、フランス革命において「習俗」が破壊された原因についてのバークの認識を問わねばならない。この論文におけるポーコックの、もう一つの重要な指摘は、バークが公債と熱狂という (D・ヒュームが別個に指摘した) 商業社会の二つの不安定化要因を結びつけて論じているという点にある。すなわち、公債への投機によって成長した貨幣利害階級と知識人や政治家が結合することで、革命的熱狂のエネルギーが鼓吹され、教会財産の没収によるアシニア紙幣の発行へとつながったとバークは見ていた (Pocock 1989, 199–209 / 訳 381–399)。他方で、貨幣利害と土地利害が穏和に共存していることが、イングランドの相対的安定性を生んでいたとバークは認識していた (Pocock 1989, 200–201, 204–205 / 訳 382–383, 389–391)。しかし、公債にかんするバークの理論的認識や、貨幣利害と熱狂の結合の危険性を英国にもバークが見出していたのか否かについて、ポーコッ

(16) Kramnick (1983) は、W・ゴドウィン、H・ラスキのバーク受容を例に、左派にとってのバークの重要性を主張しつつ、マクファーソンの解釈の一面性を批判する論考として、一読に値する。なお、マクファーソンの解釈は、『資本論』第 1 巻の注に示された「このお追従者バークは、アメリカの動乱がはじまった頃には、北アメリカ植民地の雇われ人としてイギリス寡頭政府に抵抗する自由主義者を演じたが、これとまったく同じように、フランス革命のさいには、イギリス寡頭政府の雇われ人として革命に反対するロマン主義者を演じた。しかしこのお追従者は、実際には徹底して骨がらみの俗物ブルジョワだった」という K・マルクスのバーク理解に、忠実に従ったものといえる (マルクス 2024, 下 722–723)。

クは踏み込まずに議論を閉じている。⁽¹⁷⁾

以上のような研究史の回顧から、ポーコックは次のような点で「問題提起的」であったといえることができる。まず、「言語」への注目という方法は、新たな視座を切り開いてきた。すなわち、「反動」性を否定し、バークの経済論に新たな光を当てることを可能にした。他方で、それは「決定的」ではない。ポーコックが指摘した複数の重要概念——国制と習俗、公債と熱狂など——が相互に取り結ぶ関係は、必ずしも明確ではない。また、ポーコックは複数の知的文脈にバークが根ざしていることを示唆しているが、それらが交錯するところに位置するバーク思想の全体像を、ポーコックは描かない。これらは、ポーコックのバーク論が、バークという思想家の理解をめざす以上に、より広範な「言語」の歴史を目論む彼のプロジェクトの一環として展開されていることにも由来する。⁽¹⁸⁾むしろそうであるがゆえに、ポーコックの広範な研究によって、バーク研究のみならず18世紀思想史研究の進展がもたらされたといえることができる。

その結果、より広範な18世紀思想を対象とする歴史研究から刺激をうけながら展開してきた近年のバーク研究に顕著な動向として、少なくとも次の三点を指摘することができる。

第一に、アナクロニズムを避けるべく（何らかの形で）歴史的文脈に内在した分析をおこなう研究姿勢が普及している。このことは、ポーコックの方法がその一角をなす、ケンブリッジ学派による文脈主義という思想史研究における方法論的革新の余波をうけたものである。それと同時に、ネーミア学派（への批判）以降、ほとんどが時局的論説であるバークの議論を理解する必然的な要請として、歴史的文脈をふまえた研究が蓄積されてきた結果でもある。たとえば、F・P・ロックが二巻本の伝記(Lock 1998; 2006)を出版し、O'Brien (1992)がバークのアイルランド出自を強調するなど、バークの個人的背景への理解も深まっている。⁽¹⁹⁾こうした研究成果の頂点に位置するのが、R・バークによる浩瀚な知的伝記である(Bourke 2015)。本書は、以上のような研究蓄積のうえに、同時代の政治史・思想史的なコンテキストの豊富な引証のなかでバーク思想の展開を描き出す。さらに、本書は、その膨大な情報量を「征服の精神」という主題を中心に展開させており、ポーコックが踏み

(17) バークの「熱狂」批判については、その後、Pocock (1989)が熱狂論の系譜に位置づけて分析している。それにたいする批判として、Carroll (2014)が初期バークにおいては「宗教的熱狂」にたいする好意的認識があることを指摘している。また、貫(2017)はポーコックの議論を継承し、フランス革命期のバークのプライス批判の中心に「熱狂」批判があることを指摘している。

(18) コモン・ロー思想についての指摘は、ポーコックが最初の単著『古来の国制と封建法』(1957)で政治言語としての「古来の国制」論の系譜に注目したことに由来している。また、政治経済学についての指摘は、ポーコックの名を一躍知らしめた『マキャヴェリアン・モーメント』(1975)で描き出したシヴィック・ヒューマニズムの系譜に対立する、「商業ヒューマニズム」の系譜の一齣をなしている。とくに、後者の系譜におけるバークの位置づけについては、中澤(2009, 第5章)がバークにおける政治家の資質という観点から、佐藤一進(2014, 第5-6章)がバークにおける「統治の知」という観点から、掘り下げた分析を展開している。

込まなかったバーク思想の全体像という課題に応えたものといえる。⁽²⁰⁾

第二に、バーク思想を啓蒙思想の一類型ととらえる視点が定着しつつある。その背景には、上述のケンブリッジ学派の手法がもたらした、1970年代以降のスコットランド啓蒙研究の活況がある。すなわち、眼前の商業社会を出現させた文明化の歴史的過程をめぐる探究という、18世紀後半のスコットランドの思想家に共有された知的関心への理解が深化した。こうした知的文脈をふまえ、啓蒙思想の典型的な主題に注目して、バークのフランス革命論についてD・オニールが、歴史叙述について佐藤空が、政治経済学についてG・M・コリンズが、それぞれ体系的な分析を展開している(O'Neil 2007; Sato 2018; Collins 2020)。その結果、バークと啓蒙思想家のあいだの類似と差異というポーコックが提起した論点に、さらなる光が当てられている。

第三に、歴史学、思想史、文芸批評など各方面における帝国論や国際関係論の隆盛に呼応しつつ、インド、アイルランド、奴隷制など植民地支配とのバークとのかかわりにたいする持続的な関心が見られる。たとえば、帝国史研究の旗手の一人であるD・アーミテージは、国際関係論的な関心からバークの国家理性論をグロティウス以来の系譜に位置づけている(Armitage 2013, chap. 9)。また、ポストコロニアリズムの観点からは、バークの被支配者にたいする眼差しが発見され、研究にひろがりを与えている(Suleri 1992; Mehta 1999; Gibbons 2003 など)。さらに、バークのアイリッシュ・アイデンティティや西インド諸島とのかかわりを主題にした研究もあらわれ、分析の範囲は拡大している(Donlan ed. 2007; Marshall 2019)。⁽²¹⁾

なお、上記二つの動向にとっても帝国は無視できない主題となっている。帝国論については、バークは帝国主義者か否かが基本的論点を形成してきた(角田 2017, 268–269)。近年では、Bourke (2015) は全16章のうち4章以上をインド問題にあて、バークは帝国の存在を前提にしつつも穏和な統治をもとめたという理解を提出している。他方で、O'Neil (2016) は文明化の名による植民地支配の正当化という啓蒙の負の側面をバークに見出しており、Collins (2020) はバークの貿易論は地政学的な関心の一環であることを強調している。

ここで日本の研究動向にも言及しておこう。戦後の日本におけるバーク研究は、半澤孝磨(2003, 第

(19) とりわけ、アイルランド出自への注目は、近年のトレンドである。従来、バークのアイルランド的背景が無視されてきたことについて、C・オドネルは、「バークの業績を軽視あるいは無視したいと考える者たちが彼に「アイルランドの山師」というレッテルを張ることに成功したことで、彼の業績に価値を見出した学者たちの多くが彼のアイルランド人という国民性を無視する状況が生まれたのかもしれない」と指摘している(オドネル 2012, 211)。日本では、桑島秀樹が、この方面の研究を進めている(桑島 2014; 桑島 2017b など)。また、バークの私生活について Lambert (2003) がある。

(20) 本書にたいしては多くの書評が発表されているが、なかでも、Hampsher-Monk (2018); Sagar (2018b); 荻谷(2017); 佐藤空(2020b)が有益である。本論は、第3節でR・バークのいう「征服の精神」を検討する。

(21) Donlan ed. (2007) については桑島秀樹による書評が、Marshall (2019) については角田俊男による書評がある(桑島 2011; 角田 2021)。

3章; 2019, 第1章), 中野好之(1977), 鶴田正治(1977), 小松春雄(1961; 1983)らによる訳業と研究蓄積を経て,⁽²²⁾ 岸本広司による『バーク政治思想の形成』(1989)と『バーク政治思想の展開』(2000)によって, 一つの到達点を見た。岸本の二著作は, バーク思想を同時代の思想史的・政治史的文脈のなかで, 「きわめて道徳主義的な政治家であり思想家」として描き出している(岸本 1989, 11; 2000, 769)。その一貫性をめぐる議論については留保が必要であるが,⁽²³⁾ Lock (1998; 2006)や Bourke (2015)とあわせて参照されるべき成果である。

このような蓄積を経て, 日本においても, 2000年代に入ってから, 主としてポーコックの影響を受け, バークを啓蒙思想の一類型とみなす研究が増加している。犬塚(1997)がその先駆的な業績であり, 中澤(2009), 小島(2016), 高橋(2024)などがそれに続いている。以下では, このような研究史をふまえて, バークを啓蒙思想の一類型とみなす解釈の成果を, ポーコックが残した課題に後続の研究がどのように応えたか, という点に注目しつつ, 道徳哲学, 歴史叙述, 経済思想の三領域について検討する。⁽²⁴⁾

(22) 日本におけるバークの著作の翻訳状況については, 岸本(1989, 23n. 29)に詳細な整理がある。それ以後に刊行されたのは, 中野好之編訳『バーク政治経済論集』(法政大学出版局, 2000年), 二木麻里訳『フランス革命についての省察』(光文社古典新訳文庫, 2020年), 大河内昌訳『崇高と美の起源』(平凡社ライブラリー, 2024年)である。全体として, インドやアイルランドにかかわる演説・論考や, 初期作品が, 近年の研究状況に比して翻訳が不足している。

(23) 岸本は, バーク思想を「道徳主義」「保守主義」「思慮の政治」という概念で把握し, それは, 政界進出以前からフランス革命期まで一貫していたが, 『フランス国民議会への手紙』(1791)を機に, 「彼の思慮の政治の後退」が始まったと理解している(岸本 2000, 670)。現在の研究状況からいえば, こうした「道徳主義」や「保守主義」といった概念の内実は検討に付されるべきである。また, フランス革命期のバークが「思慮の政治」から後退したという岸本の理解にたいしては, 高濱(2001)は若干の疑問を, 中澤(2001)は肯定的評価を示している。

(24) なお, この三領域は, J・ロバートソンによる啓蒙の定義に由来する。ロバートソンは, 啓蒙を「現世における人間の境遇の改善 (human betterment in this world)」に与する知的運動とみなし, その主要な領域を道徳哲学・歴史叙述・政治経済学の三領域にもとめている (Robertson 2000, 42; これを敷衍した研究として Robertson 2005; Robertson 2015 も参照)。ただし, ポーコックの啓蒙観とロバートソンの啓蒙観は対立する関係にある。すなわち, 前者が〈複数形の啓蒙〉を提唱するのにたいして, 後者は単数の〈定冠詞付き啓蒙〉を支持している。こうした啓蒙研究の動向のなかでロバートソンが占める位置については, 篠原(2009); 坂本(2020, 18–25); 上野(2021, 1–18)などを参照。とはいえ, 壽里竜や犬塚元が指摘するように, ロバートソンとポーコックは, いずれも多様な啓蒙思想の通訳可能性を前提にしておき, とりわけ, 「宗教をめぐる歴史研究を啓蒙のコア」とみなすなど, 共通点も多い(Susato 2015, 5–6; 犬塚 2020, 188)。したがって, 本論の目的にかかわる限りでは, 両者の啓蒙観の差異に立ち入る必要はなく, 啓蒙思想の全体像を見通すことができるロバートソンの議論が有益であると判断した。

3. 道徳哲学

パークは、1756年に『自然社会の擁護』（以下『擁護』と略す）を、そして翌1757年には『崇高と美の觀念の起源の探究』（以下『探究』と略す）を、いずれもロンドンのドズリ書店から出版した。これらは、文筆家としてパークの名を高らしめた著作であるが、その解釈方針をめぐって、研究者のあいだに見解の一致があるとは言い難い。ただし、その執筆意図については、2000年代に入ってから、一定の説得力を有する研究がなされている。それにより、初期パークの議論を同時代の道徳哲学の知的潮流のなかに位置づける視点が確立されつつあることを、本節では確認しよう。

そもそも、20世紀後半まで、政界進出以前のパークが著した初期作品——『擁護』、『探究』、さらに、次節以降で言及する歴史書や定期刊行物など——の重要性は、かならずしも自明ではなかった。初期作品は、主題が多岐にわたるがゆえに分析の視点を設定しにくく、政治家としてのパークに関心をもつ初期の研究者からは、ほぼ無視に近い扱いを受けてきた(McLoughlin and Boulton 1997, 1-5)。F・オゴーマンは、「彼の初期作品に、後年現れてくるものの種子を探し求めるのは魅力的だが、それは無駄な探求である」と主張している(O'Gorman 1973, 18)。こうした姿勢は、パーク思想を「統一的な哲学に整理し、それらが依拠する共通の形而上学的・認識論的基礎を発見すること」で説明する立場を批判し、主にフランス革命期のパークが使用する語彙に注目するポーコックにも共有されているといえるだろう(Pocock 1971, 204)。

事実、『擁護』や『探究』に後年のパーク思想の哲学的基礎を見出そうとする解釈は、いくつかの課題に直面してきた。たとえば、『擁護』の場合、その複雑な出版経緯が一致した解釈を阻んでいる。『擁護』は、1751年に死去したボリングブルック子爵の遺稿が『哲学的著作集』（1754）として出版され、そこにふくまれる理神論的主張が物議をかもしていたことに機縁をもつ。『擁護』は、ボリングブルックの作品の文体と形式に似せて、初版は1756年に匿名で出版された。そこでは、『自然社会の擁護——あらゆる種類の人為社会が人類にもたらす悲惨と害悪についての一見解。亡き貴族である著者から****卿への手紙』という副題が示すように、人為社会の害悪を描写し、自然社会を賛美する議論が書簡体で展開されている。こうした『擁護』の内容を文字通りに受け取る解釈も存在するが⁽²⁵⁾、それは翌年の1757年に出版された第2版に新たに付された序文の内容を無視する点に問題がある。すなわち、パークの名を明かした第2版の序文によれば、文体模倣により、理神論的論法の危険性を諷刺することが『擁護』の執筆意図であった。

ところが、このことをふまえたとしても、『擁護』の本文について、一致した解釈が得られるわけ

(25) 文字通りに解釈する代表例として Rothbard (1958)が、それにたいする即座の批判として Weston (1958)がある。

ではない。たとえば、『擁護』の後半部は、人為社会の害悪として、度重なる戦争を描写し、法曹界による法律の形式的運用は強者を利するものと批判し、貧富の格差から生じる不幸を糾弾している。これらの箇所について、パークの真意が諷刺というかたちで表現されているのではないか、という解釈がありうる(Kramnick 1977, 90–93; 中澤 2009, 63–64, 74–75; Bromwich 2014, 51–55)。また、自然社会の賛美という主題が、J・J・ルソーの『人間不平等起源論』と類似していることから、『擁護』はルソー批判も含意しているのではないか、という理解も根強い⁽²⁶⁾。

これらの、ボリングブルック批判以上の含意を読み込む解釈にたいしては、I・ハンプシャー＝モンクや高濱俊幸による批判がある。ハンプシャー＝モンクは、ルソーの第二論文を『擁護』執筆時のパークが読んだ可能性はきわめて低いという状況証拠を挙げたうえで、『擁護』の帰謬法という論法は「自然社会」という結論が反常識的であることを前提にしており、その修辞戦略は第二論文の議論が流布している状況では採用されなかったはずだと主張している(Hampsher-Monk 2010, 250–254)。同様に、『擁護』の修辞戦略に注目した高濱は、ルソー批判の可能性については判断を留保しつつも、『擁護』はボリングブルックの議論と経歴の両方にたいする全面的な批判を意図して巧妙に組み立てられており、後半部の戦争論・法律論・貧困論にパークの真意を読み取ることは難しいと主張している(高濱 2017; 高濱 2019)。

このように、文体模倣による諷刺というテキストの特異性が多様な解釈を生んできた『擁護』にたいして、体系的な哲学書である『探究』の場合は、その体系性がさまざまな読み込みを誘発してきた。『探究』は、「崇高」と「美」という感性的概念の生理学的源泉を主題にした美学書であるが、しばしば後年のパークの政治思想の理論的基礎をなすものと理解されてきた。とりわけ、近年の文芸批評的な方法にもとづく研究は、中産階級のイデオロギー的擁護や、植民地における苦痛への共感を『探究』に見出してきた。すなわち、『探究』は、奢侈・休息・女性性などにあらわれる「美」よりも、勤労・身体的苦痛・男性的美德などにあらわれる「崇高」を上位に位置づけていることから、「勤労」や「苦痛」に与する立場にパークがあると解釈することができる⁽²⁷⁾(岸本 2000, 18–20)⁽²⁸⁾。他方で、F・P・ロックは、『探究』が分析する事例はあらゆる人間に普遍的に妥当する身体的反応であり、特定の階級や政治的立場に還元することはできないと主張している(Lock 2012)。今のところ

(26) 代表例として、Courtney (1963, 41–42); Harris (1993, 6); Bromwich (2014, 44)を参照。こうした理解を提出した初期の論考である Sewall (1938)は、その根拠として、『擁護』と『人間不平等起源論』の表現が酷似する 13 箇所を具体的に挙げている。あわせて、F・P・ロックは、ボリングブルックだけでなく、ルソーとヴォルテールも『擁護』の批判対象であったと論じている(Lock 1998, 87)。

(27) 『探究』に政治思想的含意を読み込む先駆的な研究が Wood (1964)であり、それに続く代表的な研究として Wilkins (1967, 119–151); Kramnick (1977, 93–98); Reid (1985, 34–50); Mitchell (1986, 129–145); Eagleton (1989); Eagleton (1990, 31–69); White (1993); White (1994b, chap. 2); Bromwich (1997)などがある。Zerilli (1994)は、White (1993)にたいする批判であり、White (1994a)が応答を試みている。

ろ、この批判にたいして、文芸批評的な解釈が十分な応答を果たしたとはいえない。

以上のように、『擁護』と『探究』に政治的含意を見る研究は、パークの労働観・ジェンダー観・帝国論などにかんする興味深い論点を提起しているが、過度な読み込みの危険性をともなう。そこで問題になるのが、これらのテキストの執筆意図である。コンテクスト主義的な解釈だけが特権的な正当性をもつわけではないとしても、読解の方針を定めるうえでは、『擁護』や『探究』が当時の言説空間において有した意味を鑑みる必要があるだろう。

この点について、2000年代以降の研究は、一定の進展を見ている。まず、『探究』については、P・バラードが、書名 (*A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*) において「崇高と美」に付された定冠詞が一つだけであることに注目して、その根本的な意図を検討している (Bullard 2005, 171)。すなわち、『探究』は「崇高」と「美」それぞれの起源の探究ではなく、「崇高と美」という一揃いの用語法の批判を意図しているというのが、バラードの主張である。バラードによれば、こうした一揃いの用語法を普及させたのは第三代シャフツベリ伯であった。シャフツベリは、美的情念と倫理的情念を同時に喚起するものとして「崇高と美」という用語を用いたが、B・マンデヴィルによる用語法の曖昧さ (とそれが喚起しようとしている美德の実在性) への批判や、道徳感覚の存在を主張する F・ハチソンによる擁護といった一連の論争を生んでいた。バラードは、『探究』のなかでも、「趣味についての序論」、「美」を主題にした第三部、第五部における言語論が、シャフツベリを批判するべく組み立てられていると主張する (Bullard 2005, 181–186; Bullard 2012, 60–63)。これらの箇所において、趣味の規準の普遍性の主張、経験主義的な美の分析、曖昧な用語法への批判が展開されたのは、美と徳を同一視するシャフツベリ (やハチソン) のストア派的・理神論的な議論を論駁し、道徳を神意に基礎づける必要があるとパークが感じていたからだという (Bullard 2005, 190–191; Bullard 2012, 58–60)。

こうして、『探究』の意図は、『擁護』を駆動していた理神論批判と一環のものともみなされる。この見方は、J・C・D・クラークの議論をふまえたものであり、ハンプシャー＝モンクも『擁護』と『探究』、そして後年のルソー批判の企図は一貫して啓示宗教に基礎づけられた道徳的義務の擁護にあったと理解している (Clark 1985, 247–257; Hampsher-Monk 2010, 254–257)。このように解釈することの利点は、パークの議論を、反ストア派の文脈に位置づけ、初期近代の道徳哲学における利己心をめぐる論争のなかで理解する視点をもたらしことにある。

この方向での解釈は、概ね R・パークや R・キャロルによっても支持されている。たとえば、R・パークは、『探究』における「喜悅 (delight)」の概念に、パークの独自性を見出している。すなわち、『探究』は、崇高な対象がもたらす苦が除去された場合に生じる快を、通常の快と区別して「喜

(28) 『探究』に中産階級のイデオロギー的擁護を見る研究の代表が、Furniss (1993)であり、同種の理解をとるものとして、Eagleton (1990, 56–57); Fuchs (1996, 195–196); 大河内 (2019, 第6章); 中澤 (2022)がある。また、「崇高」に見られる身体的苦痛への関心に、被征服民の苦境を読み込む研究として、Gibbons (2003)や Suleri (1992)がある。

悦」と呼び、他者の苦痛にたいして「喜悅」を感じることが同胞感情を強化すると説明する。こうして利己的情念が社交性に転換される過程を、「喜悅」によって説明する論法は、グロティウス以来の利己心と利他心の調停という問題にたいするバークの独創的な介入であると R・バークは位置づける (Bourke 2015, 127–133)⁽²⁹⁾。

ただし、だからといって、バーク思想を完全にエピクロス派的立場と同一視できるわけではない。たとえば、R・バークや佐藤空は、バークはエピクロス派の無神論的傾向にたいしては批判的であったことを指摘している (Bourke 2015, 87–88, 143; Sato 2022a, 806)。また、P・バラードによれば、『探究』はエピクロス派的な議論のうえに、F・ハチソンらによるストア派的な内的感覚の理論を総合している (Bullard 2011, chap. 3)。

近年の啓蒙思想研究においては、初期近代の道德哲学をストア派／エピクロス派といった古代哲学の枠組みで理解する視点が一般的になりつつある。その嚆矢は、エピクロス主義に啓蒙の共通した特徴を見る J・ロバートソンの議論であるが、政治思想・経済思想いずれの文脈においても重要性を増している。政治思想という点では、ストア派的な自然的社交性を認めない場合に、いかにして大規模な政治社会の設立を説明するか、という政治社会の起源をめぐる論争に焦点が当たる (たとえば Sagar 2018a)。経済思想という点では、人間行動を利益追求の観点から説明する立場の基礎に、エピクロス派の利己的な人間観が見出されている (たとえば Force 2003)。

もちろん、これらは、それぞれ別個の論点であり、それに取り組むさいに各思想家が参照できた知的枠組みがエピクロス派／ストア派という古代哲学由来の系譜であったにすぎない。政治社会の基礎としての社交性、経済行動の原理としての利己心、徳性の根拠としての神慮といった論点に、ポーコックのバーク論が取り組むことはなかったが、それらは啓蒙思想家に共有された課題であった。それゆえ、上で述べたような成果をふまえて、『擁護』と『探究』をはじめとするバークの議論を、論点ごとに掘り下げて検討することが期待される。それにより、初期近代の道德哲学の潮流にたいするバークの応答を知ることができるだろう。

4. 歴史叙述

2000 年代に入ってから、バーク研究のなかで最も進展の見られる領域が歴史叙述である。その代表的な成果が、バークの著書・演説・書簡に散在する歴史的事象の描写を地域別に再構成した Sato (2018) であり、本書からは、バークの歴史認識を包括的に知ることができる。⁽³⁰⁾ その結果、「保守主義の父」というバーク像に付随していた中世社会の賛美者というイメージが明確に否定され、バー

(29) 同種の議論として Carroll (2024, 23–27) も参照。小田川大典は、こうしたバークの「喜悅」概念に「ある種の倫理的感性の陶冶という構想」を見出している (小田川 2017, 141)。

クは一貫して中世的「野蛮」から脱却した近代的「文明」の動態的な形成過程を肯定的に描いていることが示された(Sato 2018, 222–223; 佐藤空 2016, 49–50)。こうした歴史認識は、同時代の啓蒙思想家の多くと共通するものであり、⁽³¹⁾そのことをふまえ、パークの叙述がもつ同時代的な特徴を理解する道がひらかれたといえる。したがって、本節では、近年の啓蒙思想研究において関心を集めている歴史叙述の型という観点を念頭におきつつ、同時代的文脈におけるパークの歴史叙述の特性をめぐる近年の議論の成果を確認しよう。

まず、パークの歴史叙述にかんする研究の前提には、初期パークが残したテキストにたいする理解の進展がある。すなわち、従来は分析の対象となっていなかったテキストのなかに、歴史的な言説が豊富にあることが認識されるようになった。たとえば、パークが「いとこ」であるウィリアム・パーク⁽³²⁾と共著で『探究』出版と同年の1757年にドズリ書店から刊行した『植民地概説』(以下『概説』と略す)は、従来はウィリアムの手になるものと理解されてきた。『概説』は、コロンブス以降のヨーロッパ人による新大陸への入植過程を記述したものであるが、その執筆についてのパーク自身の証言は曖昧である。すなわち、ジェイムズ・ボズウェルの1789年11月の報告によれば、『概説』は「友人が執筆し、私が改訂した」ものとパークは述べている(Boswell 1789)。このことから、大部分を執筆したのはウィリアムであると考えられており、オーサーシップが確定しないため、著作集にも取められていない。しかし、F・P・ロックの1998年の指摘によれば、『概説』における一般化された原理的な説明は、ウィリアムの他の著書には見られないため、エドモンドによる記述である可能性が高い(Lock 1998, 127, 129–130)。この指摘は、推測の域を出るものではないが、その後の研究者から一定の支持を集め、パーク思想が反映された著作として『概説』を分析する研究者が増えている。⁽³³⁾また、この時期のパークが執筆したと推定される四つの草稿がR・パークによって公刊され、そこでは、議会、政党、民兵の意義が歴史的な観点から検討されている

(30) ただし、佐藤自身も認めるように、イングランド史、ヨーロッパ史、アメリカ史、アイルランド史、アジア史というパーク自身が明示的に採用したわけではない地理的な区分による整理は「きわめて人工的な再構成」である(Sato 2018, 19)。こうした分析方法については、犬塚元による議論も参照のこと(犬塚 2019, 110)。なお、これとは異なる方法をもちいた佐藤の研究として、Sato (2014); 佐藤空 (2016); 佐藤空(2017a); 佐藤空(2020a)があり、以下でも適宜参照する。

(31) 啓蒙思想研究における歴史叙述にたいする関心の高まりを代表する研究であるポーコック『野蛮と宗教』は、パリ啓蒙にたいして「プロテスタント啓蒙」の系譜を強調し、ユトレヒト条約以後の相対的に安定した国際関係にたいして共有された信頼の意識を「啓蒙のヨーロッパ」と名付けている。R・パークは、パークが「プロテスタント啓蒙」の出現に注目していることを指摘し、佐藤空は、ユトレヒト条約以後にヨーロッパは「野蛮」から脱出したというパークの歴史認識を析出している(Bourke 2015, 167; Sato 2018, 109–110)。ポーコックの議論については、犬塚(2008, 108–115)も参照。

(32) ウィリアム・パークは、エドモンド・パークがロンドンのミドル・テンブルに入学した際に保証人となったロンドンの弁護士ジョン・パークの息子である。ウィリアムとエドモンドは、生涯にわたる友情を結び、互いを「いとこ」と呼んだが、血縁関係があったかどうかは不明(Lock 1998, 65–66; 岸本 1989, 95–96)。

(Bourke 2012a; Bourke 2015, 192–201; 佐藤空 2017a, 148–149)。

さらに、1758年4月に、バークはドズリ書店と契約を結び、『年鑑』(*Annual Register*)という定期刊行物の編集を開始している。これは、18世紀前半のジャーナリズムの興隆をうけて、過去一年間に刊行された出版物の要約的集成をもとめる公衆の需要に応えようとしたものである(Lock 1998, 167–168)。当時の慣行にしたがい、『年鑑』は匿名で出版されたが、少なくとも政界進出する1765年に出版された1764年版までは、バークが実質的に単独で編集業務を担っていたと推測されている⁽³⁴⁾。このうち、毎号の冒頭におかれた「現在の戦争の歴史」という記事において、七年戦争を中心に、過去一年間の政治動向を記述している点が、バークによる同時代史として注目される(七年戦争終結後の1763年版からは「ヨーロッパの歴史」という題名に変更された)⁽³⁵⁾。また、『年鑑』末尾におかれた書評欄では、ヒュームやW・ロバートソンをはじめとする同時代の歴史書の書評が複数掲載されており、バークの歴史叙述にたいする関心をうかがい知ることができる(佐藤空 2017a, 155–158)。これらに挟まれた中間部では、「人物評」、「自然誌」、「古事物」などの記事が集められている。「人物評」では、ルネサンス以降の著名人の人格描写のみならず、一次史料の引用により当時の習俗の例証が試みられているほか、「自然誌」、「古事物」においては、動植物や鉱物についての記事やインドへの探検などの報告が取り上げられている。これらは、初期バークの民族学的・考古学的視座、あるいは、自然科学やアジア社会への関心が反映されている可能性があり、注目に値する(Lock 1998, 171–174; Bourke 2015, 163–164)。

くわえて、バークの歴史書のなかでは比較的有名な、『イングランド史略』(以下『史略』と略す)の構成についても、議論が展開されている。『史略』は、1757年2月にドズリ書店により執筆を依頼された一巻本の歴史書であったが、未完のまま原稿が残され、バークの死後、1812年に出版された。ドズリ書店との契約では、「ユリウス・カエサル時代からアン女王の治世の末まで」のイングランド史を、四つ折り版で80枚の分量で執筆する計画であったが、実際に残された原稿は30枚分であり、記述はマグナ・カルタまでで途絶している(Lock 1998, 143–144)。この中断は、1761年から政治家ハミルトンの私設秘書に就職したことが執筆時間を奪ったためと理解されており、バークは少なくとも1763年3月までは執筆意欲を保持していたと推測されている(McLoughlin 1990, 48; Lock 1998, 144; 佐藤空 2017a, 149)⁽³⁶⁾。他方で、高橋和則は、執筆時のバークの念頭にあったブラックスト

(33) R・バークは、F・P・ロックの主張を支持しつつ、『概説』がふくむコルベールティズムへの賞賛が自身に帰せられることを嫌ったために、バークは『概説』への関与を認めなかったのではないかと推測している(Bourke 2015, 162–163, 174–175)。また、佐藤空は、『概説』にはエドモンドに特徴的だと思われる一般化された記述が、やや唐突に挿入されているように見える箇所があることを実際に検証している(佐藤空 2017a, 144–146)。

(34) ただし、それ以後も、バークは『年鑑』の編集について相談をうけていた可能性がある。『年鑑』とバークのかかわりについての議論は、Lock (1998, 166)を参照。

(35) この箇所を分析した研究として、Hanczewski (2018)がある。

(36) バークが『史略』執筆時に利用した情報源の多くは、すでに特定されている(Lock 1998, 145–147; Sato 2018, 27–30)。

ンの講義の範囲がマグナ・カルタまでだったことを挙げ、『史略』の執筆は中断というよりも「一定の区切りを迎えていた」という理解を提示している(高橋 2024, 14)。あわせて、従来は『史略』の補遺をなすと考えられていた『断片——イングランド法の歴史についての試論』というテキストについても、現在では『史略』とは別個の独立した著作のための原稿であったと考えられるようになっている(Lock 1998, 150n. 88; 佐藤空 2017a, 164n. 5; 高橋 2024, 17)⁽³⁷⁾。

以上のように、バークが残した歴史的記述が『史略』以外にも多数あることが研究者のあいだで知られるようになり、それぞれのテキストの成立事情についての理解が深化したことで、その重要性が十分に認知されるようになったといえる。こうしたバークの歴史書を理解するうえで、近年の研究が強調しているのは、一定の政治的意図をもって執筆されたという実践的側面である。バークの歴史叙述は、同時代の啓蒙思想家と「哲学的歴史」の企図を共有しつつも、特定の政治状況に介入するべく執筆されたという特徴をもつからである(Sato 2018, 11–13, 241–242; 佐藤空 2020a, 102–104, 113–116)。

具体的には、次の三つの局面に、バーク歴史叙述の実践性が指摘されている。第一は、バークの祖国アイルランドにたいするイングランドによる抑圧という文脈である。Donlan (2007), オドネル(2012), Sato (2018, chap. 5), 貫(2021)は、『史略』におけるアイルランドへの言及、1761年版『年鑑』におけるジェイムズ・マクファーソンの『フィンガル』書評、生涯にわたるアイルランド史家への支援などを取り上げ、バークが、イングランド中心史観を是正し、「内側からのアイルランド史」の実現をめざしていたことをあきらかにしている。とくに、1641年のアイルランドにおける反乱は、その後のイングランドによる抑圧策を正当化する根拠になっており、その犠牲者数の見直しは、抑圧策緩和という政治的課題のためにも重要な論点であった。

第二に、『概説』や『年鑑』を取り巻く、七年戦争という文脈である。植民地をめぐる英仏間の戦争は、公衆の大きな注目を集めており、とりわけ『概説』がブリテンの植民地政策に影響を与えることを意図していたことは通説的理解を形成している(Lock 1998, 131–136, 169; Bourke 2015, 163–166)。なかでも、R・バーク、佐藤空、G・M・コリンズは、『概説』が支持する政策的立場——征服行為の正当化論、重金主義の否定、貿易規制の廃止、特許会社の設立、過剰な紙券発行への懸念など——に注目しており、バークの帝国論や貿易論を理解するうえで示唆的である(Bourke 2015, 166–176; Sato 2018, 128–130; Collins 2020, 217–235; 佐藤空 2017a, 146–148; 佐藤空 2017b, 172–174)

そして、第三が、すでにポーコックの『古来の国制と封建法』(1957)によって、その政治言語としての性質が探究されていた「古来の国制」論とのかかわりである。バークの『史略』と『断片』に、この論争に参入する意図があったことは広く認められている(Bourke 2015, 184–192; Sato 2018, 40–48; 高橋 2024, 15–20)。ここで争点となるのは、国制の連続性である。ポーコックは、フランス革命期

(37) 『断片』の全訳として、犬塚・乙幡・安藤(2015)がある。その重要性を鑑みれば、『史略』についても邦訳が待たれる。

のバークが国制の連続性を支持した一方で、初期バークは国制の変動を強調していたことを指摘しつつも、その理由を掘り下げることにはなかった(Pocock 1971, 224-227)。R・バーク、佐藤空、高橋和則らは、『史略』と『断片』における議論が、古来の国制の連続性をナイーヴに主張するウィッグの言説を問題視したバークによって、歴史的変動のうえにブリテンの自由な国制を位置づけるべく展開されたものであることを主張している。

これら三つの局面に見られるバークの実践的な歴史叙述を下支えしているのが、「征服」という主題である。その意義を詳論した先駆的研究である Bourke (2007)は、1774年のケベック州法を例にとりながら、アイルランド征服をめぐるジョン・デイヴィスの議論を基礎に形成された「征服」の穏和化という主題こそが、政治家バークの一貫して取り組んだ課題であったと主張する。この点を Bourke (2015)は敷衍し、『概説』における議論を根拠に、支配者を生む「征服の精神」と同時に、被支配者が抱く上位者への賞賛は人間本性の取り除けない特徴であるという、モンテスキューに依拠したバークの基本的認識を析出した。この不可避的な「征服」行為の穏和化が文明化の過程であると見るバークは、その過程を『史略』で叙述し、さらに政治家として「征服」の穏和化を維持することに一貫して取り組んだという(Bourke 2007, 424-430; Bourke 2015, 169-174)。

さらに、佐藤空は、「征服」にともなう外国との交流が、バークの描く「文明化」の過程において重要な役割を果たしていることを指摘している。すなわち、ポーコックが指摘したように、初期バークは法の変動を「習俗、宗教、商業」の変化によって説明する視点を有しているが、『史略』と『断片』においてはイングランドが他民族からうけた「征服」が、キリスト教の導入や学問の振興をもたらしたという認識が展開されている(Sato 2018, 31-37, 79; 佐藤空 2016, 52-60)。それゆえに、バークにとっては、戦争それ自体は破滅的な行為ではなく、社会的基礎の破壊に至らないのであれば、商業と同じく、繁栄に資する国家間の競争(emulation)の一要素であった(Sato 2018, 104-106, 112-113)。また、こうして文明化をとまなう「征服」にたいして、「被治者の同意」が付与されることが法の基礎であるという認識を、バークはマシュー・ヘイルから継承していると高橋和則は指摘している(高橋 2024, 68-70, 86-93)。これらの議論は、ポーコックが曖昧なままに残した、バークにおける「習俗」と「国制」の関係を明確化したものといえる。

以上のような実践的側面をふまえたうえで、バークが歴史的変動を記述するさいにもちいる方法に注目することで、バークの歴史叙述がもつ理論的性格を理解することができる。

第一に注目されるのは、ポーコックの指摘により注目されるようになった「習俗(manners)」が果たす役割である。この点について、近年の研究者たちは、バークの「習俗」概念に二つの異なる意味を見出しているように思われる。一つは、モンテスキューの影響下にあるバークが見る「習俗」の制度的側面である。C・P・コートニーの先駆的な研究によれば、バークは「気候、地理的環境、国民の一般精神といった物理的・社会的要因の相互に関連した結びつき」によって生活様式の差異や、法や制度の起源を理解する視点をモンテスキューから学んだ(Courtney 1963, 48)。

こうした物理的・社会的要因が「習俗」を形成する。コートニーは、『史略』の叙述が、モンテスキュー的な方法によって貫かれていることを論証しており、この指摘は現在でもなお支持されている (Courtney 1963, 48-55; O'Neil 2007, 71-73; Sato 2014, 681-683)。

こうした諸国の国制を基礎づける自然的・社会的要因としての習俗には、人間行動を規制する規範としての機能もあることを、近年の研究者は指摘している。この側面は、ポーコックが指摘した「商業は習俗に依存する」というバークの基本的認識の背後にある因果関係を掘り下げようとする研究者によってとくに強調されている。たとえば、犬塚元は、バークにとって「政治社会」は専制を導きうる人間の「情念暴走を防ぐ装置」であり、「名誉」、「名声」といった間主観的な規律を、バークは「習俗」という概念で表現したと理解している (犬塚 1997)。また、D・オニール、小島秀信、M・アームストロングといった研究者も、騎士道精神に代表される「習俗」を、中世封建制下で形成された情念の抑制装置であるにとらえている (O'Neil 2007, 134-140; 小島 2016, 129-161; Armstrong 2021)。

これらの二つの側面は、相対立するものではなく、むしろ「習俗」という「ヌエのともいえる」概念がもともと有している多面性に由来するととらえるべきだろう (犬塚 1997, 630)⁽³⁸⁾。ポーコックの説明によれば、「習俗 (manners)」は、「倫理的な *mores* と法学的な *consuetudines* が、前者の優位のもとに結合された語」である (Pocock 1985, 49 / 訳 92)。言い換えれば、国制や法の基礎となる「習俗」の制度的側面は、人間行動を規制するという「習俗」の規範的側面によって支えられているし、制度化した「習俗」によって規範性が担保されている。

しかし、これらの両側面のうち、どちらを重視するかによって、バークの社会秩序観について異なる理解が導かれている。たとえば、中澤信彦は、「習俗」の規範的側面を念頭に、「私が考える唯一の自由は、秩序と結びついた自由」という『ブリストル到着演説』(1774)におけるバークの有名な一節について、ここでバークが意味する自由とは、「道徳的義務にもとづく自己規律 (情念の抑制) によってはじめて確保されるもの」であったと理解している (中澤 2015a, 30-33, 40)。

他方で、高橋和則は、同じ箇所について、「必ずしも秩序のために自由を一定程度制限すべきであるという議論ではない」と理解し、「バークが「秩序」という時、それは「秩序なるもの」一般ではなく、むしろ市民的状态、さらに言えば国家のことを意味していると捉えるべきではないのだろうか」と述べている。ここで高橋が「市民的状态」で念頭においているのは所有権の保障という法制度であり、そうした法制度は「習俗」の変動をつうじて形成されたものととらえられる (高橋 2024, 86-87, 149-153)。これらの見解の相違は、バークにおける「習俗」の相違の理解に由来するといえる。「習俗」という鍵概念を利用してバーク思想を特徴づける際は、その意味内容に留意する必要があるだろう。

(38) 犬塚元によれば、「あえて日本語にするならば、「マナーズ」とは、歴史的に形成された「慣習」「生活様式」、そしてまた人間を律する「道徳・規範」であり、あるいは人間関係のなかでの外面的な「振舞」、優れた振舞たる「作法」「洗練」であった。ある意味で、この意味内容の多様さが18世紀における習俗概念の多用・重要性、ならびに解釈にくさを説明している」 (犬塚 1997, 629)。

第二に、近代ヨーロッパを特徴づける「習俗」が形成された時期としての封建制にたいするバークの評価である。近年の啓蒙の歴史叙述の研究においては、かつて強調されていた「段階論 (stadial theory)」あるいは「四段階論 (four-stages theory)」への注目が退き、むしろ啓蒙思想家の多くが共有していた問題意識として、いかにして封建制から「近代」の商業社会が出現したかという点に焦点を当てるようになってきている (たとえば Pye 2023)。ここで、バークの封建制にたいする評価は、モンテスキューやスミスとは異なることが指摘されている (Courtney 1963, 53–55; Sato 2018, 102–103)。こうした側面を強調して、D・オニールや小島秀信は、支配者の「野心」と、それにたいする服従者の「賞賛」を封建的規律の基礎にある人間本性であると指摘するバークのサクソン期の叙述をふまえて、それが生み出す「自発的な不平等と従属」こそが、フランス革命期のバークが「騎士道精神」という概念で擁護しようとした近代ヨーロッパ文明の基礎であると解している (O'Neil 2007, 77–78, 135; 小島 2016, 187–196)。

他方で、R・バークは、むしろ、このような従属関係が穏和化される過程として、バークは文明化をとらえていたと理解している (Bourke 2015, 187–188)。とくに、R・バークによれば、封建制下に形成された貴族という中間団体を、専制の防御壁ととらえたモンテスキューにたいして、バークはそれでは不十分で、自由の保障として陪審員制度が必要であると考えていた (Bourke 2007, 421–423, 428)。こうした封建制にたいするバークの評価をどのように理解するかが、今後の課題であると思われる。

以上のように、歴史叙述に焦点を当てる研究は、「習俗」と「国制」というポーコックが指摘した二つの概念間の関係について、議論を深めてきたといえる。これらの論点は、バークにおける「文明化」の過程を理解するうえで、不可欠な議論を含んでいる。そうした「文明化」のうえに成り立つ、商業社会にかかわる論点を、次節では確認しよう。

5. 経済思想

晩年のバークを訪ねた「あるきわめて著名な文芸界の紳士」の伝えるところによると、バークは、「アダム・スミス博士」の人物像、学識、功績を高く評価したうえで、次のように語ったという。

スミス博士は、私と少し会話したあとで、政治経済学 (political economy) について自分とまったく同じような考えを、知り合う以前から有していた唯一の人物だと言ってくれた。(Bisset 1800, II, 424, 428–429)

この逸話は、初期の伝記作家である R・ビセットが『エドマンド・バークの生涯』(1798)の第2版を1800年に出版するさいに追加したものである。そのため信憑性は定かではないが、研究者のあいだでは、これを引用することが「ほとんど義務的」となるほどに広く知られている (Winch 1985, 231)⁽³⁹⁾。

さらに、同じく1800年に、晩年のバークが執筆した『穀物不足にかんする思索と詳論』(以下『思

『思索と詳論』と略す)が死後出版されたことも、バークとスミスの親近性を印象づけた。というのも、それに付された序文で、編者が次のように述べてバークの権威を箔付けしたからである(Jones 2021, 19; Plassart 2024, 131)。

諸国民の富についての名高い著作を準備中のアダム・スミス博士から、彼〔バーク〕は助言を求められ、その意見には非常な尊敬が払われた。(Burke 1800, vi)

実際に、『思索と詳論』では、穀物市場と労働市場への政府介入にたいする批判が展開されており、バークがスミスに似た経済的自由主義者であるという理解を生むことになった。それゆえ、『思索と詳論』はバークの経済思想の集約的表現とみなされ、その解釈が研究史において中心的論点をなしてきた。近年では、そうした想定に強い疑義を呈する見解もあるにもかかわらず、バーク経済思想を主題にした今のところ最も包括的な研究書である Collins (2020)は、この『思索と詳論』をあえて議論の起点におくという挑戦的な構成をとっている。そのため、以下では、まず『思索と詳論』を中心にバーク経済思想の研究史を回顧したうえで、コリンズの研究の意義と今後の課題を検討することにした。

従来、『思索と詳論』は、主として次の二つの観点から注目されてきた。一つは、『思索と詳論』において展開されている貧民救済への批判が、19世紀英国の過酷な福祉政策、さらには、21世紀の英米の保守的思考に影響を与えたのではないかと、という点である(Plassart 2024, 128)。この観点による解釈は、社会に埋め込まれた慣習的な富の分配(モラル・エコノミー)から、自己調整的な市場による分配(ポリティカル・エコノミー)への転換期において、前者を否定し、後者を支持した人物の一人としてバークをとらえる E・P・トンプソンや K・ボランニーの見解が基礎にある。G・ヒンメルファーフは、この見方を支持して、貧民救済を否定するバークは、スミスよりも極端な自由放任主義者であると主張した(Himmelfarb 1985, 66-73)。

こうした議論は、もう一つの問題へと研究者を誘ってきた。すなわち、『思索と詳論』での市場経済を支持する主張は、『省察』などで展開された伝統的秩序を擁護する主張と矛盾するのではないかと、という点である(いわゆる「バーク問題」⁽⁴⁰⁾)。この問題にたいして、C・B・マクファーソンは、バークの擁護した伝統的秩序はすでに「資本主義的秩序」と化していたと理解することにより、バークは「自由競争の市場経済」の一貫した信奉者であったという回答を与えた(Macpherson 1980, 4-5, 52 / 訳 8, 85)。他方で、D・ウィンチは、マクファーソンの理解は、スミスについてもバークについても表面的であると批判し、時局論である『思索と詳論』の執筆背景をふまえつつ、そこでのバークの主張はス

(39) ビセットの逸話にたいする各研究者の評価については、中澤信彦の簡便な整理を参照のこと(中澤 2009, 35-37)。

ミスの（賃金の決定過程などにかんする）基本的な見解と相違すると主張している（Winch 1985）。

こうして『思索と詳論』を根拠に、バーク経済思想の基本的性格をめぐる議論が繰り広げられてきたが、そもそも『思索と詳論』は、バークの生前には未公開の覚書にすぎない。その執筆背景にある、1795年の農業不作による穀物価格の上昇という文脈を無視して、『思索と詳論』をバーク経済思想の集約的表現とみなすことには無理がある（Conniff 1994, 124–125; 佐藤空 2017b, 182–185）。とりわけ、中澤信彦は、バークは「政治経済学」の語を公収入の賢明な管理についての学問という意味でもちいていたと指摘し、彼の経済思想の主著とみなされるべきは、『思索と詳論』ではなく、七年戦争後の英仏の経済状況を包括的に分析した『「現在の国情」論』（1769）であると主張している（Nakazawa 2010; 中澤 2009, 198–209; 中澤 2019）。

以上のような整理から、『思索と詳論』をめぐる錯綜した研究状況が明らかであろう。コリンズは、こうした状況にあえて挑み、『思索と詳論』を自身のバーク解釈の中心にすえている。ただし、文脈を無視して、単純な自由放任主義者としてバークを理解するわけではない。コリンズは、『思索と詳論』における市場介入への批判は、抽象的理性の限界にたいするバークの初期から一貫した認識に由来しており、フランス革命の自然権思想にたいする批判と共通の文脈に属するものと理解している（Collins 2020, 119, 131–136, 478–487; 同種の見解として立川 2014）。そして、『思索と詳論』の主張は、単純な自由放任ではなく、国家のなすべきこと（「法に属する事柄」）と、国家のなすべきではないこと（「習俗だけが規制できる事柄」）を明確に区分し、貧民救済を後者の領域に入れることにありと理解している（Collins 2020, 127–131; 同種理解として Sato 2022b, 90–91）。

そのうえで、貧民救済が後者の領域に含まれる根拠として、バークの「ハイエク的」な市場観を挙げている。すなわち、コリンズによれば、「バークとハイエク（とオーストリア学派は一般に）、財・サービスの真の価格は、売り手の希望ではなく、買い手の主観的選好によって決定されると考えた」（Collins 2020, 54）。バークは、こうした市場における価格決定を「神の法」と呼んで支持するのみならず、各市場間は複雑に結びついていることを前提にしており、「意図せざる結果」という表現をもちいずとも、ある市場にたいする政府介入が他の市場に悪影響を及ぼす可能性を主張した（Collins 2020, 48–55）。

さらにコリンズは、『思索と詳論』が（その貪欲な経済活動が伝統的な道徳観から非難の対象になっていた）仲買人の活動を擁護していることに注目する（Collins 2020, 57–70）。というのも、市場法則にした

（40）マクファーソンは、「どうして階層制秩序の擁護者であると同時に自由主義的市場社会の支持者でありえたのか」という問題を提起し、バークの一貫性にかんする他の問題——貴族階級にたいするバークの両義的な態度、アメリカ独立の支持とフランス革命の批判との外見上の矛盾——とあわせて、「バーク問題（a Burke problem）」と呼んだ（Macpherson 1980, 1, 4 / 訳 3, 8–9）。コリンズは、『道徳感情論』と『国富論』の一貫性を問う「アダム・スミス問題」になぞらえ、『思索と詳論』と『省察』のあいだの一貫性問題を「エドモンド・バーク問題（Das Edmund Burke Problem）」と表現している（Collins 2020, 5）。

がった仲買人の自己利益の追求は、生産者と消費者間での財の流通を促進することで、社会全体の繁栄をもたらすという論理に、パークなりの「見えざる手」が見出されるからである (Collins 2020, 61)。その背後にあるのが、自発的な交換は当事者双方に利益をもたらすというプラスサムの認識、そして、市場での取引は各当事者にしかわからない「ローカルな知識」の交換過程であるという反合理主義的認識である (Collins 2020, 119–127, 130–131, 478–482)。

こうした議論のうえに、コリンズは、「伝統的な徳と近代的な経済」とのあいだの矛盾をめぐる「パーク問題」は「存在しない」と結論する (Collins 2020, 533)。というのも、「ハイエクの」にパークの市場観をとらえることで、それをポーコックによる「商業に先立つ習俗」という指摘に接続させることができるからである。すなわち、パークは「市場秩序の集積された知識は、需給法則の原則と適用によって涵養される」と理解しており、それゆえ、「交換の自由にたいするパークの支持は、彼の伝統についての概念的実質と調和していた。人間活動は、変動する慣習に適応する余地を必要とするからである」 (Collins 2020, 146–147)。したがって、「ブリテンの歴史的発展は、ゆっくりと蓄積された政治的伝統や社会的慣習の産物であるのみならず、消費者と生産者の変動する選好に由来する市場での活動が集積された洞察と適応の産物でもあった」 (Collins 2020, 522)。このように理解することで、土地所有権の尊重、アシニア紙幣の生む熱狂への批判といったフランス革命期のパークの議論を、彼の自由市場の支持と整合させている (Collins 2020, chaps. 11–12)。

以上のようにして、コリンズは、自由市場の支持、伝統的秩序の擁護、国家の役割の容認という従来、矛盾する関係にあるとみなされてきたパーク思想の諸要素を調和させることを試みている。

しかし、こうした一貫性の提示には、疑問も残る。コリンズの議論は、パークの市場観を「ハイエクの」と理解することによって支えられているが、パークの言説における「市場」という用語が、現代の抽象的な意味での市場とは異なる可能性が、ハンプシャー＝モンクによって指摘されている (Hampsher-Monk 2021, 13–15)。さらに、パークの市場認識が、ハイエクの的な主観価値の認識にまで到達していたという評価は、学説史的理解として性急ではないか。たとえば、中澤信彦は、『思索と詳論』の「価格と価値の理論は、素朴な需要供給説の域を出ておらず、再生産（資本蓄積）の理論にも欠けている」という評価にとどめている (中澤 2009, 37)⁽⁴¹⁾。

また、コリンズの分析は現在までのところ最も網羅的であるが、そうした豊富な情報を取める器として最終的に採用されている、ポーコックによって提示された「商業は習俗に依存する」という認識は、やや分不相応であるようにも思われる。コリンズは、上で言及したように、国家が主体的な役割を果たすべき場面についてのパークの認識も豊富に論じている。すなわち、コリンズによると、パークは行財政改革に取り組む過程で、公職には名誉が必要であり、その報酬の決定を市場原理

(41) たしかに、コリンズは、パークがF・ガリアーニの著作を読んでいた可能性も示唆しているが、限界効用の先駆的な概念をパークが受容していたことを立証するのは容易ではないだろう (Collins 2020, 67)。

にゆだねるべきでないと主張していた(Collins 2020, 175–176)。また、自由貿易は、それ自体として支持されるのではなく、帝国の名誉を維持しうる限りにおいて認められるため、バークは敵対国にたいする貿易規制を認めていたという(Collins 2020, 337–338)。著作権、特許会社などによる独占の効果をバークは認める一方で、経済的独占が政治的支配に転換することを危惧していたともコリンズは指摘している(Collins 2020, 356–358, 390–393)。さらに、公財政は賢明な支出を旨とすべきであり、歳入増加のためには重税を課すのではなく、経済活動を促進すべきである、というコリンズが繰り返し指摘するバークの論理は、中澤の分析にも通じる(Collins 2020, chap. 5; 中澤 2009, 第9章)。こうした個々の事例についての具体的な議論は、きわめて有益であるが、しかし最終的に提示される「商業は習俗に依存する」という枠組みに回収されてしまう。

このことが問題なのは、バークの経済思想が一貫した体系性を有すると想定することで、バーク自身が向き合った知的文脈とのかかわりが見えにくくなってしまっているように思われるからである。実際、コリンズ以後に発表された研究は、この点にいくつかの不満を示している。たとえば、R・ワットモアは、コリンズがD・ウィンチやI・ホントの指摘を受けとめていないと批判する。コリンズの議論は、ポーコックの枠組みと Bourke (2015)によって参照された政治史的な文脈に基本的に依拠している。そのことにより、バークの議論の神学的背景や、商業をめぐる国際紛争がもたらす不安定性といったウィンチやホントの指摘した論点が後景に退いているという(Whatmore 2021)⁽⁴²⁾。また、コリンズは、スミスやモンテスキューとバークの比較もおこなっているが、彼らがどのような知的課題に取り組んでいたのかという知的文脈や、その過程でどのように各思想家の議論が変遷したのかという通時的な変化には、踏み込んでいない(Collins 2020, 139–143, 498–503)。

したがって、コリンズ以後に残された課題として、体系性を前提するのではなく、個々の経済的問題にたいして、どのような概念をバークは利用したのかという点を掘り下げ、バーク思想の同時代的な特徴を浮かび上がらせることがもとめられる。

いくつかの研究は、すでにこの方向で分析を進めている。たとえば、バーク経済思想の古典的・神学的背景をコリンズは過小評価していると Chountis (2022)は批判し、慈善をキリスト教的な義務ととらえるバークの議論は、それを不完全義務に入れるプーフェンドルフ以降の自然法学の伝統からの逸脱であると主張している。⁽⁴⁴⁾ また、Plassart (2024)は、『思索と詳論』における「労働貧民」という語は、マンデヴィル以降の怠惰貧民観を批判したモンテスキューの用語法を、バークがモン

(42) こうしたコリンズの姿勢は、『『思索と詳論』がバークの政治経済学の知的構想の起点であり、『省察』はその結論である』という、両著作の執筆年(『思索と詳論』は1795年、『省察』は1790年)を考慮すると奇妙に響く一節によくあらわれている(Collins 2020, 406)。

(43) 後者の点について、ワットモアは2023年の著書で、戦争と累積する公債という商業社会の不安定化要因がもたらす「啓蒙の終焉」という同時代的な危機感のなかで、バークの対仏戦争論を理解している(Whatmore 2023, chap. 6)。

(44) 自然法学の伝統におけるバークの位置については、Sato (2022a, 803–805)にも示唆的な議論がある。

テスキューとは異なる主張のために転用したものであると指摘して、同時代的な特徴を浮かび上がらせている。

さらに、パーク経済思想の形成過程という点では、彼のアイルランド的背景と、同時代の自然科学とのかかわりも検討されるべきである。たとえば、コリンズも断片的に言及しているように、パークの初期の経済論はアイルランド問題を扱ったものであった。トリニティ・カレッジ・ダブリン在学中に、学友たちと結成した「文芸協会」における議事録には、奢侈論、高賃金論、著作権、貿易問題などについて論じた形跡が残されている。この時期に、同じく学友と発行していた週刊誌『改革者』(*Reformer*)や、政界進出の直前の時期に執筆していた『カトリック教徒刑法論』では、アイルランドの経済的苦境についての分析が見られる。これらのテキストを、コリンズは無視しているわけではなく、また、キャナヴァンや中澤による分析も存在する(Collins 2020, 98–99, 320, 411–412, 414–416; Canavan 1995, 24–26; 中澤 2009, 69–73)。しかし、これらの議論は文脈から切り離され、断片的に引用されるのが常である。アイルランドの経済問題は、前世紀からたとえばジョン・デヴィスやウィリアム・モリスナーなどによって論じられており、パークはそれらの議論を読んでいた(Sato 2022a, 802)。こうした知的文脈のなかにパークの認識を位置づけることで、パークが取り組んだ問題の輪郭が明瞭になるだろう。

さらに、コリンズの重要な指摘の一つとして、パークがふんだんな統計データを引用し、平均の計算方法などについて恣意的な統計データの利用を批判していた点が挙げられる(Collins 2020, 260–263)。ヒュームの経済論において自然科学の実験の比喩が示唆を与えていたという指摘(Schabas 2001)などをふまえると、パークの自然科学理解が経済論に与えた影響についても、残された証拠は少ないが、検討の余地はあるだろう。パーク自身、初期の『ノート・ブック』では冶金術についてのメモを残しており、『概説』では空気の密度の比喩をもちいて人口の移動を説明している(Somerset 1957, 93–95; Burke and Burke 1757, II, 294)。

以上のように、コリンズの研究は、従来のパーク経済思想研究が抱えていた錯綜した状況を克服し、統一的な理解を試みた点で、画期的である。しかし、その全体像を、「商業は習俗に依存する」というポーコックの指摘に依拠して組み立てたことは、かえって同時代的な知的文脈とのパークの関係を見えにくくするうらみがある。コリンズの議論をふまえた、さらなる同時代的な検討が今後の課題といえる。⁽⁴⁵⁾

(45) なお、本節では言及できなかったパーク経済思想にかんする重要な領域として、彼の貨幣論・公信用論がある。この点については、Sato (2022a, 806–809); 立川(2017)を参照。

6. おわりに

本論では、ポーコックのバーク論をふまえ、バーク思想を啓蒙思想の一類型とみなす諸研究の成果を検討してきた。ポーコックの指摘は、複数の知的文脈にバークが依拠していたことへの理解を確立したことに画期性があったが、それぞれの側面がバークにおいてどのように両立しているのか、という点については曖昧さが残されていた。

その後の研究の進展により、道徳哲学の領域においては、ポーコックが取り上げることのなかった『擁護』や『探究』における議論から、バークの反ストア派的な基本的立場が理解されるようになっていく。歴史叙述にかんしては、「古来の国制」論とスコットランド啓蒙の語彙との連続性をめぐって、多くの研究が蓄積されている。それらの研究が提示する見解は、一致点を見ていない部分があるにせよ、「習俗」概念の用法を掘り下げる重要性を示唆している。さらに、経済思想の領域では、従来その全体像が錯綜していたのにたいして、「商業は習俗に依存する」という認識を中心に、バークが取り組んだ経済問題が掘り起こされている。

以上のような、ポーコック以後の研究状況からは、ポーコックの指摘の画期性ととともに、それが残した課題が膨大であることがうかがえる。バークは18世紀思想史のなかで、どのように先行する「言語」を利用したのか。バーク研究の活況は、まだしばらく続きそうである。

参 考 文 献

- Armitage, David. 2013. *Foundations of Modern International Thought*. Cambridge University Press.
平田雅博・山田園子・細川道久・岡本慎平訳『思想のグローバル・ヒストリー——ホブズから独立宣言まで』法政大学出版局、2015年
- Armstrong, Madeleine. 2021. 'Edmund Burke's 'Age of Chivalry': The Foundation of Civilized Liberty'. *Studies in Burke and His Time*. 30: 42–71
- Berlin, Isaiah. [1979] 2013. 'The Counter-Enlightenment'. In *Against the Current: Essays in the History of Ideas*. 2nd. ed., edited by Henry Hardy, 1–32. Princeton University Press. 三辺博之訳「反啓蒙思想」, 松本礼二編『反啓蒙思想 他二篇』岩波文庫, 2021年
- Bisset, Robert. 1800. *The Life of Edmund Burke: Comprehending an Impartial Account of His Literary and Political Efforts, and a Sketch of the Conduct of Character of His Most Eminent Associates, Coadjutors and Opponents*. 2nd. ed. in 2 vols. George Cawthorn.
- Boswell, James. 1789. 'James Boswell to William Johnston Temple: Saturday, 28 November 1789'. In *Electronic Enlightenment Scholarly Edition of Correspondence*, edited by Robert McNamee et al. University of Oxford. <https://doi.org/10.13051/ee:doc/boswjaOU0020381a1c>.
- Bourke, Richard. 2007. 'Edmund Burke and the Politics of Conquest'. *Modern Intellectual History* 4 (3): 403–432. <https://doi.org/10.1017/S1479244307001333>.
- Bourke, Richard. 2012a. 'Party, Parliament, and Conquest in Newly Ascribed Burke Manuscripts'.

- The Historical Journal* 55 (3): 619–652. <https://doi.org/10.1017/S0018246X12000209>.
- Bourke, Richard. 2012b. ‘Burke, Enlightenment and Romanticism’. In *The Cambridge Companion to Edmund Burke*, edited by Christopher Insole and David Dwan, 27–40. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CCO9780511794315.005>.
- Bourke, Richard. 2015. *Empire and Revolution: The Political Life of Edmund Burke*. Princeton University Press.
- Bourke, Richard. 2018. ‘What Is Conservatism? History, Ideology and Party’. *European Journal of Political Theory* 17 (4): 449–475. <https://doi.org/10.1177/1474885118782384>.
- Brewer, John. 1975. ‘Rockingham, Burke and Whig Political Argument’. *The Historical Journal* 18 (1): 188–201. <https://doi.org/10.1017/S0018246X00008748>.
- Bromwich, David. 1997. ‘The Sublime before Aesthetics and Politics’. *Raritan* 16 (4): 30–51.
- Bromwich, David. 2014. *The Intellectual Life of Edmund Burke: From the Sublime and Beautiful to American Independence*. Belknap Press of Harvard University Press.
- Bullard, Paddy. 2005. ‘The Meaning of the “Sublime and Beautiful”: Shaftesburian Contexts and Rhetorical Issues in Edmund Burke’s Philosophical Enquiry’. *The Review of English Studies* 56 (224): 169–191. <https://doi.org/10.1093/res/hgi048>.
- Bullard, Paddy. 2011. *Edmund Burke and the Art of Rhetoric*. Cambridge University Press.
- Bullard, Paddy. 2012. ‘Burke’s Aesthetic Psychology’. In *The Cambridge Companion to Edmund Burke*, edited by Christopher Insole and David Dwan, 53–66. Cambridge University Press.
- Burke, Edmund. [1790] 1989. *Reflections on the Revolution in France*. In *The Writings and the Speeches of Edmund Burke. Vol. 8: The French revolution 1790–1794*, edited by L. G. Mitchell, 53–293. Oxford University Press. 半澤孝磨訳『フランス革命の省察』みすず書房, 1978 年
- Burke, Edmund. 1800. *Thoughts and Details on Scarcity, Originally Presented to the Right Hon. William Pitt, in the Month of November, 1795*. T. Gillet.
- Burke, Edmund and William Burke. 1757. *An Account of the European Settlements in America*. in 2 vols. J. Dodsley.
- Canavan, Francis. 1960. *The Political Reason of Edmund Burke*. Duke University Press.
- Canavan, Francis. 1995. *The Political Economy of Edmund Burke: The Role of Property in His Thought*. Fordham University Press.
- Carroll, Ross. 2014. ‘Revisiting Burke’s Critique of Enthusiasm’. *History of Political Thought* 35 (2): 317–344.
- Carroll, Ross. 2024. *Edmund Burke*. Polity.
- Chountis, I. P. 2022. ‘Justice and Charity: The Role of Aristotelianism and Anglicanism in Edmund Burke’s *Thoughts and Details on Scarcity*’. *The European Journal of the History of Economic Thought* 29 (6): 1022–1041. <https://doi.org/10.1080/09672567.2022.2136730>.
- Clark, J. C. D. 1985. *English Society, 1688–1832: Ideology, Social Structure, and Political Practice during the Ancien Regime*. Cambridge University Press.
- Cobban, Alfred. 1929. *Edmund Burke and the Revolt against the Eighteenth Century: A Study of the Political and Social Thinking of Burke, Wordsworth, Coleridge, and Southey*. Macmillan.
- Collins, G. M. 2019. ‘Edmund Burke, Strauss, and the Straussians’. *Perspectives on Political Science* 48 (3): 192–209. <https://doi.org/10.1080/10457097.2019.1582977>.
- Collins, G. M. 2020. *Commerce and Manners in Edmund Burke’s Political Economy*. Cambridge University Press.
- Collins, G. M. 2022. ‘Spontaneous Order and Civilization: Burke and Hayek on Markets, Contracts and Social Order’. *Philosophy & Social Criticism* 48 (3): 386–415. <https://doi.org/10.1177/>

0191453721990683.

- Conniff, James. 1994. *The Useful Cobbler: Edmund Burke and the Politics of Progress*. State University of New York Press.
- Courtney, C. P. 1963. *Montesquieu and Burke*. Basil Blackwell.
- Craig, David. 2012. 'Burke and the Constitution'. In *The Cambridge Companion to Edmund Burke*, edited by David Dwan and Christopher Insole, 104–116. Cambridge University Press.
- Deane, Seamus. 2012. 'Burke in the United States'. In *The Cambridge Companion to Edmund Burke*, edited by Christopher Insole and David Dwan, 221–233. Cambridge University Press.
- Donlan, S. P., ed. 2007. *Edmund Burke's Irish Identities*. Irish Academic Press.
- Donlan, S. P. 2007. 'The "genuine voice of its records and monuments"?: Edmund Burke's "interior history of Ireland"'. In *Edmund Burke's Irish Identities*, edited by Seán Patrick Donlan, 69–101. Irish Academic Press.
- Dreyer, F. A. 1979. *Burke's Politics: A Study in Whig Orthodoxy*. Wilfrid Laurier University Press.
- Dwan, David, and C. J. Insole, eds. 2012. *The Cambridge Companion to Edmund Burke*. Cambridge University Press.
- Eagleton, Terry. 1989. 'Aesthetics and Politics in Edmund Burke'. *History Workshop Journal* 28 (1): 53–62. <https://doi.org/10.1093/hwj/28.1.53>.
- Eagleton, Terry. 1990. *The Ideology of the Aesthetic*. Blackwell.
- Fitzpatrick, Martin, and Peter Jones, eds. 2017. *The Reception of Edmund Burke in Europe*. Bloomsbury Academic.
- Force, Pierre. 2003. *Self-Interest before Adam Smith: A Genealogy of Economic Science*. Cambridge University Press.
- Fuchs, Michel. 1996. *Edmund Burke, Ireland, and the Fashioning of Self*. Voltaire Foundation.
- Furniss, Tom. 1993. *Edmund Burke's Aesthetic Ideology: Language, Gender, and Political Economy in Revolution*. Cambridge University Press.
- Gibbons, Luke. 2003. *Edmund Burke and Ireland: Aesthetics, Politics and the Colonial Sublime*. Cambridge University Press.
- Hampsher-Monk, Iain. 2010. 'Rousseau, Burke's Vindication of Natural Society, and Revolutionary Ideology'. *European Journal of Political Theory* 9 (3): 245–266. <https://doi.org/10.1177/1474885110363979>.
- Hampsher-Monk, Iain. 2018. 'The Spirits of Edmund Burke'. *Modern Intellectual History* 15 (3): 865–877. <https://doi.org/10.1017/S1479244317000130>.
- Hampsher-Monk, Iain. 2021. 'Edmund Burke, Political Economy, and the Market'. *Cosmos + Taxis* 9 (9+10): 10–18.
- Hanczewski, Paweł. 2018. '"When Liberty and Order Kiss": Edmund Burke and the History Articles in the *Annual Register*'. *Studies in Burke and His Time* 27: 56–86.
- Harris, Ian. 1993. *Burke: Pre-Revolutionary Writings*. Cambridge University Press.
- Himmelfarb, Gertrude. 1985. *The Idea of Poverty: England in the Early Industrial Age*. 1st Vintage Books ed. Vintage Books.
- Jones, Emily. 2015. 'Conservatism, Edmund Burke, and the Invention of a Political Tradition, c. 1885–1914'. *The Historical Journal* 58 (4): 1115–1139. <https://doi.org/10.1017/S0018246X14000661>.
- Jones, Emily. 2017. *Edmund Burke and the Invention of Modern Conservatism, 1830–1914: An Intellectual History*. Oxford University Press.
- Jones, Emily. 2021. '"No Meagre Doctrine of Non-Interference": The Posthumous Career of Edmund Burke's Economic Thought in Nineteenth- and Early Twentieth-Century Britain'. *Cosmos + Taxis*

- Kramnick, Isaac. 1977. *The Rage of Edmund Burke: Portrait of an Ambivalent Conservative*. Basic Books.
- Kramnick, Isaac. 1983. 'The Left and Edmund Burke'. *Political Theory* 11 (2): 189–214. <https://doi.org/10.1177/0090591783011002003>.
- Lambert, E. R. 2003. *Edmund Burke of Beaconsfield*. University of Delaware Press.
- Langford, Paul. 2002. 'Introduction: Time and Space'. In *The Eighteenth Century: 1688–1815*, edited by Paul Langford, 1–35. Oxford University Press. 坂下史監訳『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 第8巻 18世紀——1688年～1815年』慶應義塾大学出版会, 2013年
- Lenzner, S. J. 1991. 'Strauss's Three Burkes: The Problem of Edmund Burke in *Natural Right and History*'. *Political Theory* 19 (3): 364–390. <https://doi.org/10.1177/0090591791019003005>.
- Lock, F. P. 1985. *Burke's Reflections on the Revolution in France*. Allen & Unwin.
- Lock, F. P. 1997. 'Unpublished Burke Letters, 1783–96'. *The English Historical Review* 112 (445): 119–141.
- Lock, F. P. 1998. *Edmund Burke: Volume I, 1730–1784*. Clarendon Press.
- Lock, F. P. 1999. 'Unpublished Burke Letters (II), 1765–97'. *The English Historical Review* 114 (457): 636–657.
- Lock, F. P. 2003. 'Unpublished Burke Letters (III), 1763–96'. *The English Historical Review* 118 (478): 940–982.
- Lock, F. P. 2006. *Edmund Burke: Volume II, 1784–1797*. Clarendon Press.
- Lock, F. P. 2012. 'The Politics of Burke's Enquiry'. In *The Science of Sensibility: Reading Burke's Philosophical Enquiry*, edited by Koen Vermeir and Michael Funk Deckard, 125–138. Springer Netherlands.
- Lucas, Paul. 1968. 'On Edmund Burke's Doctrine of Prescription; Or, an Appeal from the New to the Old Lawyers'. *The Historical Journal* 11 (1): 35–63.
- Maciag, Drew. 2013. *Edmund Burke in America: The Contested Career of the Father of Modern Conservatism*. Cornell University Press.
- Macpherson, C. B. 1980. *Burke*. Oxford University Press. 谷川昌幸訳『バーク——資本主義と保守主義』御茶の水書房, 1988年
- Marshall, P. J. 2019. *Edmund Burke and the British Empire in the West Indies: Wealth, Power, and Slavery*. Oxford University Press.
- McLoughlin, T. O. 1990. 'Edmund Burke's "Abridgment of English History"'. *Eighteenth-Century Ireland* 5: 45–59.
- McLoughlin, T. O. and J. T. Boulton. 1997. 'Introduction'. In *Writings and Speeches of Edmund Burke: Vol. 1 The Early Writings*, edited by T.O. McLoughlin and James T. Boulton, 1–22. Clarendon Press.
- Mehta, U. S. 1999. *Liberalism and Empire: A Study in Nineteenth-Century British Liberal Thought*. University of Chicago Press.
- Mitchell, W. J. T. 1986. *Iconology: Image, Text, Ideology*. University of Chicago Press.
- Nakazawa, Nobuhiko. 2010. 'The Political Economy of Edmund Burke: A New Perspective'. *Modern Age* 52 (4): 285–292.
- Namier, Lewis. 1958. 'The Character of Burke'. *The Spectator*, 19 December 1958, 895–896. <https://archive.spectator.co.uk/article/19th-december-1958/19/books>
- Nelson, J. O. 2005. 'Odyssey of a Burke Revivalist: An Intellectual Biography of Peter J. Stanlis'. In *An Imaginative Whig: Reassessing the Life and Thought of Edmund Burke*. edited by Ian

- Crowe, 228–239. University of Missouri Press.
- O'Brien, C. C. 1992. *The Great Melody: A Thematic Biography and Commented Anthology of Edmund Burke*. University of Chicago Press.
- O'Gorman, Frank. 1973. *Edmund Burke: His Political Philosophy*. Allen & Unwin.
- O'Neill, D. I. 2007. *The Burke-Wollstonecraft Debate: Savagery, Civilization, and Democracy*. The Pennsylvania State University Press.
- O'Neil, D. I. 2016. *Edmund Burke and Conservative Logic of Empire*. University of California Press.
- Pitkin, H. F. 1969. *Representation*. Atherton Press. 早川誠訳『代表の概念』名古屋大学出版会, 2017年
- Plassart, Anna. 2024. 'Montesquieu, Smith and Burke on the "Labouring Poor": An Eighteenth-Century Debate'. In *Ideas of Poverty in the Age of Enlightenment*, edited by Niall O'Flaherty and R. J. W. Mills, 128–147. Manchester University Press.
- Pocock, J. G. A. 1971. *Politics, Language, and Time: Essays on Political Thought and History*. Atheneum.
- Pocock, J. G. A. 1985. *Virtue, Commerce, and History: Essays on Political Thought and History, Chiefly in the Eighteenth Century*. Cambridge University Press.
- Pocock, J. G. A. 1987. 'Introduction'. In Edmund Burke. *Reflections on the Revolution in France*, edited by J. G. A. Pocock, xii–lvi. Hackett.
- Pocock, J. G. A. 1989. 'Edmund Burke and the Redefinition of Enthusiasm: The Context as Counter-Revolution'. In *The French Revolution and the Creation of Modern Political Culture. Volume 3, The Transformation of Political Culture 1789–1848*, edited by François Furet and Mona Ozouf, 19–43. Pergamon Press.
- Pye, Tom. 2023. 'The Scottish Enlightenment and the Remaking of Modern History'. *The Historical Journal* 66(4): 746–772. <https://doi.org/10.1017/S0018246X23000225>.
- Reid, Christopher. 1985. *Edmund Burke and the Practice of Political Writing*. Gill and Macmillan.
- Robertson, John. 2000. 'The Scottish Contribution to the Enlightenment'. In *The Scottish Enlightenment: Essays in Reinterpretation*, edited by Paul Wood, 37–62. Rochester University Press.
- Robertson, John. 2005. *The Case for the Enlightenment: Scotland and Naples 1680–1760*. Cambridge University Press.
- Robertson, John. 2015. *The Enlightenment: A Very Short Introduction*. Oxford University Press.
- 野原慎司・林直樹訳『啓蒙とはなにか——忘却された〈光〉の哲学』白水社, 2019年
- Rothbard, M. N. 1958. 'A Note on Burke's Vindication of Natural Society'. *Journal of the History of Ideas* 19 (1): 114–118. <https://doi.org/10.2307/2707957>.
- Sagar, Paul. 2018a. *The Opinion of Mankind: Sociability and the Theory of the State from Hobbes to Smith*. Princeton University Press.
- Sagar, Paul. 2018b. 'Burke Unboxed'. *Political Theory* 46 (2): 280–298. <https://doi.org/10.1177/0090591716672403>.
- Sato, Sora. 2014. 'Edmund Burke's Ideas on Historical Change'. *History of European Ideas* 40 (5): 675–692. <https://doi.org/10.1080/01916599.2013.867651>.
- Sato, Sora. 2018. *Edmund Burke as Historian: War, Order and Civilisation*. Palgrave Macmillan.
- Sato, Sora. 2022a. 'Edmund Burke's Political Economy: A Historiographical Essay'. *History of Political Economy* 54 (4): 801–812. <https://doi.org/10.1215/00182702-9895945>.
- Sato, Sora. 2022b. 'Rethinking Burke and Smith: Political Economy and Foundations of Industry'. *The European Journal of the History of Economic Thought* 29 (1): 82–103. <https://doi.org/10.1080/09672567.2021.1914699>.
- Schabas, Margaret. 2001. 'David Hume on Experimental Natural Philosophy, Money, and Fluids'.

- History of Political Economy* 33 (3): 411–436. <https://doi.org/10.1215/00182702-33-3-411>.
- Sewall, R. B. 1938. ‘Rousseau’s Second Discourse in England from 1755 to 1762’. *Philological Quarterly* 17: 97–114.
- Skjönsberg, Max. 2021. *The Persistence of Party: Ideas of Harmonious Discord in Eighteenth-Century Britain*. Cambridge University Press.
- Smyth, James. 2012. ‘Lewis Namier, Herbert Butterfield and Edmund Burke’. *Journal for Eighteenth-Century Studies* 35 (3): 381–389. <https://doi.org/10.1111/j.1754-0208.2011.00417.x>.
- Somerset, H. V. F. 1957. *A Note-Book of Edmund Burke*, Cambridge University Press.
- Stanlis, P. J. [1958] 1986. *Edmund Burke and the Natural Law*. Huntington House.
- Stephen, Leslie. 1876. *History of English Thought in the Eighteenth Century*. In 2 vols. Smith, Elder.
- 中野好之訳『十八世紀イギリス思想史』（上・中・下）筑摩書房，1970 年
- Strauss, Leo. 1953. *Natural Right and History*. University of Chicago Press. 塚崎智・石崎嘉彦訳『自然権と歴史』ちくま学芸文庫，2013 年
- Suleri, Sara. 1992. *The Rhetoric of English India*. University of Chicago Press.
- Susato, Ryu. 2015. *Hume’s Sceptical Enlightenment*. Edinburgh University Press.
- Thompson, E. P. 1991. *Customs in Common*. Merlin.
- Weston, J. C. 1958. ‘The Ironic Purpose of Burke’s Vindication Vindicated’. *Journal of the History of Ideas* 19 (3): 435–441. <https://doi.org/10.2307/2708048>.
- Whatmore, Richard. 2021. ‘How disputatious a subject is Edmund Burke?’. *Cosmos + Taxis* 9 (9+10): 3–9.
- Whatmore, Richard. 2023. *The End of Enlightenment: Empire, Commerce, Crisis*. Penguin Books.
- White, S. K. 1993. ‘Burke on Politics, Aesthetics, and the Dangers of Modernity’. *Political Theory* 21 (3): 507–527. <https://doi.org/10.1177/0090591793021003009>.
- White, S. K. 1994a. ‘Desperately Seeking Marie?: A Response to Linda M. G. Zerilli’. *Political Theory* 22 (2): 329–332.
- White, S. K. 1994b. *Edmund Burke: Modernity, Politics, and Aesthetics*. Sage Publications.
- Wilkins, B. T. 1967. *The Problem of Burke’s Political Philosophy*. Clarendon Press.
- Winch, Donald. 1985. ‘The Burke-Smith Problem and Late Eighteenth-Century Political and Economic Thought’. *The Historical Journal* 28 (1): 231–247. <https://doi.org/10.1017/S0018246X00002302>.
- Winch, Donald. 1996. *Riches and Poverty: An Intellectual History of Political Economy in Britain, 1750–1834*. Cambridge University Press.
- Wood, Neal. 1964. ‘The Aesthetic Dimension of Burke’s Political Thought’. *Journal of British Studies* 4 (1): 41–64.
- Zerilli, L. M. G. 1994. ‘No Thrust, No Swell, No Subject?: A Critical Response to Stephen K. White’. *Political Theory* 22 (2): 323–328.
- 青木康（1980）「ネーミア以後のイギリス 18 世紀政党史——1760 年代をめぐる最近の動向」、『史学雑誌』89 (1): 64–89. [Aoki, Yasushi (1980) “Namier Igo no Igrisu 18seiki Seitoshi: 1760nendai wo meguru Saikin no Doko”, *Shigaku Zasshi* 89 (1): 64–89.]
- 厚見恵一郎（2019）「論理嫌い（ミソロゴス）と歴史主義への道——シュトラウスのパーク論に寄せて」, 石崎・厚見編著, 第 16 章所収 [Atsumi, Keiichiro (2019) “Ronri-girai (Misologos) to Rekishishugi he no Michi: Strauss no Burke Ron ni yosete,” in Ishizaki and Atsumi eds., Chapter. 16.]
- 石崎嘉彦・厚見恵一郎編著（2019）『レオ・シュトラウスの政治哲学——『自然権と歴史』を読み解く』ミネルヴァ書房 [Ishizaki, Yoshihiko, and Atsumi Keiichiro eds. (2019) *Leo Strauss no Seiji Tetsugaku: Shizenken to Rekishi wo Yomitoku*, Minerva Shobo.]

- 犬塚元 (1997) 「エドモンド・バーク, 習俗 (マナーズ) と政治権力——名声・社会的関係・洗練の政治学」, 『國家學會雑誌』 110 (7): 607–664. [Inuzuka, Hajime (1997) “Edmund Burke, Manners to Seiji Kenryoku: Meisei, Shakai-teki Kankei, Senren no Seijigaku,” *Kokka Gakkai Zasshi*, 110 (7): 607–664.]
- 犬塚元 (2008) 「『啓蒙の歴史叙述』の政治思想——ポーコック『野蛮と宗教』とヒューム」, 『思想』 1007: 108–132. [Inuzuka, Hajime (2008) “‘Keimo no Rekishi Jojutsu’ no Seiji Shiso: Pocock ‘Yaban to Shukyo’ to Hume,” *Shiso*, 1007: 108–132.]
- 犬塚元 (2017a) 「受容史・解釈史のなかのバーク」, 中澤・桑島編, 第1章所収 [Inuzuka, Hajime (2017a) “Juyoshi, Kaishakushi no Naka no Burke,” in Nakazawa and Kuwajima eds., Chapter. 1.]
- 犬塚元 (2017b) 「政治思想史の通史叙述の形成期におけるバーク解釈の変転——学説史において, バークはいつから保守主義の創設者とされたか」, 『法学志林』 114 (4): 71–84. [Inuzuka, Hajime (2017b) “Seiji Shiso-shi no Tsushi Jojutsu no Keiseiki ni okeru Burke Kaishaku no Henten: Gakusetu-shi ni oite, Burke wa Itsu kara Hoshushugi no Sosetsusha to Sareta ka,” *Hogakushirin*, 114 (4): 71–84.]
- 犬塚元 (2019) 「書評: Sora Sato, *Edmund Burke as Historian: War, Order and Civilisation*」, 『イギリス哲学研究』 42: 108–110. [Inuzuka, Hajime (2019) “Shohyo: Sora Sato, *Edmund Burke as Historian: War, Order and Civilisation*,” *Igirisu Tetsugaku Kenkyu*, 42: 108–110.]
- 犬塚元 (2020) 「書評: 『啓蒙とはなにか——忘却された〈光〉の哲学』」, 『社会思想史研究』 44: 187–190 [Inuzuka, Hajime (2020) “Shohyo: *Keimo towa Nani ka: Bokyaku sareta ‘Hikari’ no Tetsugaku*,” *Shakai Shiso-shi Kenkyu*, 44: 187–190.]
- 犬塚元・乙幡翔太郎・安藤有史 (2015) 「エドモンド・バーク「断章: イングランド法の歴史をめぐる論考」(全訳)」, 『法學』(東北大学法学部) 79 (5): 461–473. [Inuzuka, Hajime, Otohata Shotaro, and Ando Yuji (2015) “Edmund Burke ‘Dansho: England-hou no Rekishi wo meguru Ronko’ (Zenyaku),” *Hogaku* (Tohoku Daigaku Hogakubu), 79 (5): 461–473.]
- 上野大樹 (2021) 「J. G. A. ポーコックとジョナサン・イスラエル以降の啓蒙研究の諸展開——壽里竜『ヒュームの懐疑主義的啓蒙』に寄せて」, 一橋大学『人文・自然研究』 15: 1–37. [Ueno, Hiroki (2021) “J. G. A. Pocock to Jonathan Israel Iko no Keimo Kenkyu no Sho Tenkai: Susato Ryu ‘Hume no Kaigishugi-teki Keimo’ ni yosete,” *Hitotsubashi Daigaku, Jimbun Shizen Kenkyu*, 15: 1–37.] <https://doi.org/10.15057/71650>.
- 大河内昌 (2019) 『美学イデオロギー——商業社会における想像力』名古屋大学出版会 [Okochi, Sho (2019) *Bigaku Ideology: Shogyo Shakai ni okeru Sozoryoku*, Nagoya Daigaku Shuppankai.]
- 小田川大典 (2017) 「バーク『崇高と美』における生理学・倫理学・美学——言語の政治学のために」, 堀田新五郎・森川輝一編『講義 政治思想と文学』ナカニシヤ出版, 第4講所収 [Odagawa, Daisuke (2017) “Burke ‘Suko to Bi’ ni okeru Seirigaku, Rinrigaku, Bigaku: Gengo no Seijigaku no tame ni,” in Hotta Shingoro and Morikawa Terukazu eds., *Kogi: Seijishiso to Bungaku*, Nakanishiya Shuppan, Lecture 4.]
- 小田部胤久 (2024) 『芸術の条件 新装版——近代美学の境界』東京大学出版会 [Otabe, Tanehisa (2024) *Geijutsu no Joken: Shinsoban: Kindai Bigaku no Kyokai*, Tokyo Daigaku Shuppankai.]
- 音無通宏 (1998) 「モラル・エコノミーとポリティカル・エコノミー」, 『経済学史学会年報』 36: 26–39. [Otonashi, Michihiro (1998) “Moral Economy to Political Economy,” *Keizaigakushi Gakkai Nempo*, 36: 26–39.] <https://doi.org/10.11498/jshet1963.36.26>.
- オドネル, キャサリン (2012) 「エドモンド・バークとアイルランドの「長い17世紀」」高桑晴子訳, 『思想』 1063: 208–229. [O’Donnell, Catherine (2012) “Edmund Burke to Ireland no ‘Nagai 17seiki’,” translated by Haruko Takakuwa, *Shiso*, 1063: 208–229.]
- 荻谷千尋 (2017) 「書評: Richard Bourke, *Empire and Revolution: The Political Life of Edmund Burke*」, 『イギリス哲学研究』 40: 88–89. [Kariya, Chihiro (2017) “Shohyo: Richard Bourke, *Empire and Revolution: The Political Life of Edmund Burke*,” *Igirisu Tetsugaku Kenkyu*, 40: 88–89.]

- 岸本広司 (1989) 『バーク政治思想の形成』御茶の水書房 [Kishimoto, Hiroshi (1989) *Burke Seiji Shiso no Keisei*, Ochanomizu Shobo.]
- 岸本広司 (2000) 『バーク政治思想の展開』御茶の水書房 [Kishimoto, Hiroshi (2000) *Burke Seiji Shiso no Tenkai*, Ochanomizu Shobo.]
- 岸本広司・松園伸 (1999) 「政党」, 佐藤正志・添谷育志編『政治概念のコンテクスト——近代イギリス政治思想史研究』早稲田大学出版部, 第8章所収 [Kishimoto, Hiroshi and Matsuzono Shin (1999) “Seito,” in Sato Seishi and Soeya Yasuyuki eds., *Seiji Gainen no Context: Kindai Igarisu Seiji Shiso-shi Kenkyu*, Waseda Daigaku Shuppanbu, Chapter 8.]
- 桑島秀樹 (2011) 「書評: Seán Patrick Donlan ed., *Edmund Burke's Irish Identities*」, 『イギリス哲学研究』34: 83–85. [Ku wajima, Hideki (2011) “Shohyo: Seán Patrick Donlan ed., *Edmund Burke's Irish Identities*, ” *Igarisu Tetsugaku Kenkyu*, 34: 83–85.]
- 桑島秀樹 (2014) 「E・バークのカレッジ在学期における〈ダブリンの憂鬱〉あるいは〈バリトア幻想〉と文芸趣味の実践的醸成——キルデアの親友クエーカー R・シャクルトン宛書簡から」, 『エール』33: 195–213 [Ku wajima, Hideki (2014) “E. Burke no College zaigaku-ki ni okeru ‘Dublin no Yuutsu’ aruiwa ‘Ballitore Genso’ to Bungei Shumi no Jissen-teki Josei: Kildare no Shinyu Quaker R. Shackleton ate Shokan kara,” *Eire*, 33: 195–213.]
- 桑島秀樹 (2017a) 「崇高・趣味・想像力」, 中澤・桑島編, 第4章所収 [Ku wajima, Hideki (2017a) “Suko, Shumi, Sozoryoku,” in Nakazawa and Ku wajima eds., Chapter. 4.]
- 桑島秀樹 (2017b) 「アイリッシュ・コネクション」, 中澤・桑島編, 第5章所収 [Ku wajima, Hideki (2017b) “Irish Connection,” in Nakazawa and Ku wajima eds., Chapter. 5.]
- 古賀敬太編 (2013) 『政治概念の歴史的展開 第6巻』晃洋書房 [Koga, Keita ed. (2013) *Seiji Gainen no Rekishi-teki Tenkai vol.6*, Koyo Shobo.]
- 小島秀信 (2016) 『伝統主義と文明社会——エドモンド・バークの政治経済哲学』京都大学学術出版会 [Kojima, Hidenobu (2016) *Dento Shugi to Bunmei Shakai: Edmund Burke no Seiji Keizai Tetsugaku*, Kyoto Daigaku Gakujutsu Shuppankai.]
- 小松春雄 (1961) 『イギリス保守主義史研究——エドモンド・バークの思想と行動』御茶の水書房 [Komatsu, Haruo (1961) *Igarisu Hoshushugi-shi Kenkyu: Edmund Burke no Shiso to Kodo*, Ochanomizu Shobo.]
- 小松春雄 (1983) 『イギリス政党史研究——エドモンド・バークの政党論を中心に』中央大学出版部 [Komatsu, Haruo (1983) *Igarisu Seito-shi Kenkyu: Edmund Burke no Seito-ron wo Chushin ni*, Chuo Daigaku Shuppambu.]
- 坂下史 (2010) 「長い18世紀」, 近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社, 第5章所収 [Sakashita, Chikashi (2010) “Nagai 18seiki,” in Kondo Kazuhiko ed., *Igarisu-shi Kenkyu Nyumon*, Yamakawa Shuppansha, Chapter. 5.]
- 坂本達哉 (2020) 「『啓蒙』思想史としての『社会思想史』」, 『社会思想史研究』44: 19–36 [Sakamoto, Tatsuya (2020) “‘Keimo’ Shiso-shi toshite no ‘Shakai Shiso-shi’,” *Shakai Shiso-shi Kenkyu*, 44: 19–36.]
- 佐藤空 (2016) 「征服と交流の文明社会史——初期バークと近世ブリテンにおける歴史叙述の系譜」, 『経済学史研究』58 (1): 49–68. [Sato, Sora (2016) “Seifuku to Koryu no Bunmei Shakai-shi: Shoki Burke to Kinsei Britain ni okeru Rekishi Jojutsu no Keifu,” *Keizaigaku-shi Kenkyu*, 58 (1): 49–68.]
- 佐藤空 (2017a) 「歴史叙述」, 中澤・桑島編, 第6章所収 [Sato, Sora (2017a) “Rekishi Jojutsu,” in Nakazawa and Ku wajima eds., Chapter. 6.]
- 佐藤空 (2017b) 「経済思想 (1) ——制度と秩序の政治経済学」, 中澤・桑島編, 第7章所収 [Sato, Sora (2017b) “Keizai Shiso (1): Seido to Chitsujo no Seiji Keizai-gaku,” in Nakazawa and Ku wajima eds., Chapter. 7.]
- 佐藤空 (2020a) 「『共通理解』の再構成としての歴史——啓蒙期ブリテンにおける歴史叙述の展開」, 青木裕子・大谷弘編『「常識」によって新たな世界は切り拓けるか——コモン・センスの哲学と思想史』晃洋書

- 房, 第5章所収 [Sato, Sora (2020a) “‘Kyotsu Rikai’ no Saikosei toshite no Rekishi: Keimo-ki Britain ni okeru Rekishi Jojutsu no Tenkai,” in Aoki Hiroko and Otani Hiroshi eds., *‘Joshiki’ ni yotte Aratana Sekai wa Kirihirakeru ka: Common Sense no Tetsugaku to Shiso-shi*, Koyo Shobo, Chapter. 5.]
- 佐藤空 (2020b) 「書評: Richard Bourke, *Empire and Revolution: The Political Life of Edmund Burke*」, 『日本18世紀学会年報』35: 108–109. [Sato, Sora (2020b) “Shohyo: Richard Bourke, *Empire and Revolution: The Political Life of Edmund Burke*,” *Nihon 18seiki Gakkai Nempo*, 35: 108–109.]
- 佐藤一進 (2014) 『保守のアポリアを超えて——共和主義の精神とその変奏』NTT出版 [Sato, Takamichi (2014) *Hoshu no Aporia wo Koete: Kyowashugi no Seishin to sono Henso*, NTT Shuppan.]
- 佐藤一進 (2019) 「シュトラウスのパーク——なぜ近代性の危機は抗うほどに増幅されるのか」, 石崎嘉彦・厚見恵一郎編著, 第15章所収 [Sato, Takamichi (2019) “Strauss no Burke: Naze kindai-sei no Kiki wa Aragau hodo ni Zofuku sareru no ka,” in Ishizaki Yoshihiko and Atsumi Keiichiro eds., Chapter.15.]
- 篠原久 (2009) 「学界展望: スコットランド啓蒙」, 『イギリス哲学研究』32: 147–151. [Shinohara, Hisashi (2009) “Gakkai Tembo: Scotland Keimo,” *Igirisu Tetsugaku Kenkyu*, 32: 147–151.]
- 末富浩 (2003) 「ポーコックにおけるパーク」, 『イギリス哲学研究』26: 53–71. [Suetomi, Hiroshi (2003) “Pocock ni okeru Burke,” *Igirisu Tetsugaku Kenkyu*, 26: 53–71.] https://doi.org/10.24587/sbp.2003_053.
- 高橋和則 (2024) 『エドモンド・パークの国制論』法政大学出版局 [Takahashi, Kazunori (2024) *Edmund Burke no Kokusei-ron*, Hosei Daigaku Shuppanyoku.]
- 高濱俊幸 (2001) 「パークにおける「思慮の政治」——岸本広司『パーク政治思想の展開』を読んで」, 『政治思想研究』1: 51–56. [Takahama, Toshiyuki (2001) “Burke ni okeru ‘Shiryo no Seiji’: Kishimoto Hiroshi ‘Burke Seiji Shiso no Tenkai’ wo Yonde,” *Seiji Shiso Kenkyu*, 1: 51–56.] https://doi.org/10.11326/jjpt2000.1.0_51.
- 高濱俊幸 (2017) 「エドモンド・パーク『自然社会の擁護』におけるボリングブルック批判の技法」, 『恵泉女学園大学紀要』29: 3–21. [Takahama, Toshiyuki (2017) “Edmund Burke ‘Shizen Shakai no Yogo’ ni okeru Bolingbroke Hihan no Giho,” *Keisen Jogakuen Daigaku Kiyo*, 29: 3–21.]
- 高濱俊幸 (2019) 「エドモンド・パーク『自然社会の擁護』における逆説の批判」, 『恵泉女学園大学紀要』31: 3–22. [Takahama, Toshiyuki (2019) “Edmund Burke ‘Shizen Shakai no Yogo’ ni okeru Gyakusetsu no Hihan,” *Keisen Jogakuen Daigaku Kiyo*, 31: 3–22.]
- 立川潔 (2014) 「エドモンド・パークにおける市場と統治——自然権思想批判としての「穀物不足に関する思索と詳論」」, 『成城大学経済研究所研究報告』67: 1–31. [Tachikawa, Kiyoshi (2014) “Edmund Burke ni okeru Shijo to Tochi: Shizenken-shiso Hihan toshite no ‘Kokumotsu Fusoku ni kansuru Shisaku to Shoron,’” *Seijo Daigaku Keizai Kenkyujo Kenkyu Hokoku*, 67: 1–31.]
- 立川潔 (2017) 「経済思想 (2) ——財産の原理と公信用」, 中澤・桑島編, 第8章所収 [Tachikawa, Kiyoshi (2017) “Keizai Shiso (2): Zaisan no Genri to Koshinyo,” in Nakazawa and Kuwajima eds., Chapter.8]
- 角田俊男 (2017) 「戦争・帝国・国際関係」, 中澤・桑島編, 第11章所収 [Tsunoda, Toshio (2017) “Senso, Teikoku, Kokusai-kankei,” Nakazawa and Kuwajima eds., Chapter. 11.]
- 角田俊男 (2021) 「書評: P. J. Marshall, *Edmund Burke and the British Empire in the West Indies: Wealth, Power, and Slavery*」, 『イギリス哲学研究』44: 75–81. [Tsunoda, Toshio (2021) “Shohyo: P. J. Marshall, *Edmund Burke and the British Empire in the West Indies: Wealth, Power, and Slavery*,” *Igirisu Tetsugaku Kenkyu*, 44: 75–81.]
- 鶴田正治 (1977) 『イギリス政党成立史研究』亜紀書房 [Tsuruta, Seiji (1977) *Igirisu Seito Seiritsu-shi Kenkyu*, Aki Shobo.]
- 中澤信彦 (2001) 「書評: 岸本広司『パーク政治思想の展開』」, 『社会思想史研究』25: 187–190. [Nakazawa, Nobuhiko (2001) “Shohyo: Kishimoto Hiroshi *Burke Seiji Shiso no Tenkai*,” *Shakai Shiso-shi Kenkyu*, 25: 187–190.]

- 中澤信彦 (2009) 『イギリス保守主義の政治経済学——バークとマルサス』 ミネルヴァ書房 [Nakazawa, Nobuhiko (2009) *Igirisu Hoshushugi no Seiji Keizaigaku: Burke to Malthus*, Minerva Shobo.]
- 中澤信彦 (2015a) 「エドモンド・バーク——「義務」なき「選択の自由」の帰結」, 佐藤光・中澤信彦編『保守的自由主義の可能性——知性史からのアプローチ』ナカニシヤ出版, 第1章所収 [Nakazawa, Nobuhiko (2015a) “Edmund Burke: ‘Gimu’ naki ‘Sentaku no Jiyu’ no Kiketsu,” in Sato Hikaru and Nakazawa Nobuhiko eds., *Hoshu-teki Jiyushugi no Kano-sei: Chisei-shi kara no approach*, Nakanishiya Shuppan, Chapter. 1.]
- 中澤信彦 (2015b) 「ハイクはバークをどのように読んだのか?——ハイクの保守主義観の特質と意義」, 『関西大学経済論集』64 (3-4): 249-271. [Nakazawa, Nobuhiko (2015b) “Hayek wa Burke wo Dono yoni Yonda no ka?: Hayek no Hoshushugi-kan no Tokushitsu to Igi,” *Kansai Daigaku Keizai Ronshu*, 64 (3-4): 249-271.]
- 中澤信彦・桑島秀樹編 (2017) 『バーク読本——〈保守主義の父〉再考のために』昭和堂 [Nakazawa, Nobuhiko and Kuwajima Hideki eds. (2017) *Burke Dokuhon: ‘Hoshushugi no Chichi’ Saiko no tame ni*, Showado.]
- 中澤信彦 (2018) 「政府の「なすべきこと」と「なすべからざること」——ケインズはムーアとバークから何を学んだのか」, 只腰親和・佐々木憲介編『経済学方法論の多元性——歴史的視点から』蒼天社出版, 第10章所収 [Nakazawa, Nobuhiko (2018) “Seifu no ‘Nasubeki koto’ to ‘Nasubekarazaru koto’: Keynes wa Moore to Burke kara Nani wo Mananda no ka,” in Tadakoshi Chikakazu and Sasaki Kensuke eds., *Keizaigaku Hohoron no Tagensei: Rekishi-teki Shiten kara*, Sotensha Shuppan, Chapter. 10.]
- 中澤信彦 (2019) 「バーク経済思想研究の最前線——「バークとスミス」はどのように論じられてきたのか」, 『経済学史研究』60 (2): 102-105. [Nakazawa, Nobuhiko (2019) “Burke Keizai Shiso Kenkyu no Saizen-sen: ‘Burke to Smith’ wa Donoyoni Ronjirarete kita no ka,” *Keizaigaku-shi Kenkyu*, 60 (2): 102-105.]
- 中澤信彦 (2022) 「人間本性・共感・習俗——バーク『崇高と美の探究』の社会思想」, 『経済学研究』(愛知学院大学) 9 (2): 37-52. [Nakazawa, Nobuhiko (2022) “Ningen Honsei, Kyokan, Shuzoku: Burke ‘Suko to Bi no Tankyu’ no Shakai-shiso,” *Keizaigaku Kenkyu* (Aichi Gakuin Daigaku), 9 (2): 37-52.]
- 中野好之 (1977) 『評伝バーク——アメリカ独立戦争の時代』みすず書房 [Nakano, Yoshiyuki (1977) *Hyoden Burke: Amerika Dokuritsu-senso no Jidai*, Misuzu Shobo.]
- 中野好之 (2002) 『バークの思想と現代日本人の歴史観——保守改革の政治哲学と皇統継承の理念』御茶の水書房 [Nakano, Yoshiyuki (2002) *Burke no Shiso to Gendai Nihonjin no Rekishi-kan: Hoshu Kaikaku no Seiji Tetsugaku to Koto Keisho no Rinen*, Ochanomizu Shobo.]
- 貫龍太 (2017) 「エドモンド・バーク『フランス革命の省察』における熱狂と政治社会——プライス受容と批判の分析から」, 京都大学『経済論叢』191 (4): 15-38. [Nuki, Ryuta (2017) “Edmund Burke ‘France Kakumei no Shosatsu’ ni okeru Nekkyo to Seijishakai: Price Juyo to Hihan no Bunseki kara,” *Kyoto Daigaku, Keizai Ronso*, 191 (4): 15-38.] <https://doi.org/10.14989/232827>.
- 貫龍太 (2021) 「バーク研究からの複合国家論」, 岩井淳・竹澤祐丈編『ヨーロッパ複合国家論の可能性——歴史学と思想史の対話』ミネルヴァ書房, 第9章所収 [Nuki, Ryuta (2021) “Burke Kenkyu kara no Fukugo Kokka-ron,” in Iwai Jun and Takezawa Hiroyuki eds., *Europe Fukugo Kokka-ron no Kano-sei: Rekishigaku to Shiso-shi no Taiwa*, Minerva Shobo, Chapter. 9.]
- 半澤孝磨 (2003) 『ヨーロッパ思想史における〈政治〉の位相』岩波書店 [Hanzawa, Takamaro (2003) *Europe Shiso-shi ni okeru ‘Seiji’ no Iso*, Iwanami Shoten.]
- 半澤孝磨 (2019) 『回想のケンブリッジ——政治思想史の方法とバーク, コールリッジ, カント, トクヴィル, ニューマン』みすず書房 [Hanzawa, Takamaro (2019) *Kaiso no Cambridge: Seiji Shiso-shi no Hoho to Burke, Coleridge, Kant, Tocqueville, Newman*, Misuzu Shobo.]
- 星野太 (2017) 『崇高の修辞学』月曜社 [Hoshino, Futoshi (2017) *Suko no Shujigaku*, Getsuyosha.]

- 間宮陽介 (2014) 「ケインズの政治哲学——経済学における社会と国家」, 杉田敦編『岩波講座 政治哲学 4 国家と社会』岩波書店, 第 5 章所収 [Mamiya, Yosuke (2014) “Keynes no Seiji Tetsugaku: Keizai-gaku ni okeru Shakai to Kokka,” in Sugita Atsushi ed., *Iwanami Koza Seiji Tetsugaku 4: Kokka to Shakai*, Iwanami Shoten, Chapter. 5.]
- マルクス, カール (2024) 『資本論 第一巻』上・下, 今村仁司・三島憲一・鈴木直訳, ちくま学芸文庫 [Marx, Karl (2024) *Shihon-ron vol.1*, Jo/Ge, translated by Imamura Hitoshi, Mishima Kenichi, and Suzuki Tadashi, Chikuma Gakugei Bunko.]
- 柳愛林 (2014) 「エドモンド・バークと明治日本——金子堅太郎『政治論略』における政治構想」, 『国家学会雑誌』127 (9・10): 105–168. [Ryu, Aerim(2014) “Edmund Burke to Meiji Nihon: Kaneko Kentaro ‘Seijironryaku’ ni okeru Seiji Koso”, *Kokka Gakkai Zasshi*, 127 (9/10): 105–168.]

要旨: 18 世紀英国の政治家エドモンド・バークは、「保守主義の父」として知られてきたが、近年の研究は従来のバーク像に見直しを迫っている。本論では、そうした研究動向をもたらしたポーコックのバーク論が研究史上に占める位置を確認したうえで、主として 2000 年代以降のバーク研究の成果を、道徳哲学・歴史叙述・経済思想の三領域について検討する。それにより、バーク思想を啓蒙思想の一類型ととらえる視座の意義と課題を展望する。

キーワード: バーク, 保守主義の父, 啓蒙, 習俗, 国制